《V》　【明治女学校創立】

〈旧約聖書翻訳事業の完成〉

明治十六年(三九歳)から明治女学校創立の明治十九年(四二歳)までの三年間は木村熊二の人生で最も輝いていた時である

西群馬教会設立を中心とした伝導活動は、国内の基督督教関係者やミッションから高い評価を得ていた。その他に旧約聖書翻訳事業、ＹＭＣＡ(基督教青年会)の勝動にも参画していた。

熊二の基督教指導者としての身分は、ミッションと呼ばれる米国オランダ改革派(アメリカンダッチリフォーム)日本伝導局(ミッション)所属の宣教師でそこから報酬を受けていた。　ミッションの資金は本国からの送金を外国人宣教師が運営、日本での財源は寄附金とミッションスクールと呼ばれる女学校の運営が主であった。

日本政府は欧米、諸外国との外交で近代化をアピールする為に、女性の参加が不可欠と気付き急遽実施したのが鹿鳴館外交で、その中心を担う人材を女子教育機関に求めた。この施策は付け焼刃的で華美に走ったことが、国民の反感を買い　基督教に対してもその攻撃の目が向けられた。

その為基督教を通じて日本の若者たちに海外への目を開かせようと、外国人宣教師と日本人指導者が推進していたＹＭＣＡ活動も思うように進展しなくなっていた。

日本語翻訳の聖書は、すでに新約聖書が明治十二年九月に完成していた。　この翻訳には外国人宣教師からの指導を受けた部分がかなりあった。

旧約聖書の日本語訳に関しては日本人の手による翻訳を目指した。　これはカトリック(旧教)・プロテスタント(新教)を問わず日本の基督教徒達の悲願で、　熊二は帰国直後に奥野昌綱に誘われ、明治十七年一月に各教派の役員選挙で選ばれた、旧約聖書翻訳事務委員会の九名のうちの一人となって参加日本人の翻訳を、外国人委員の意見を聞き、討論の上で進められた。　英語が堪能で、ブランズウィク神学校で学んだラテン語の造詣も深く、文才にも長けていた熊二はメンバーの中心的な存在であった

明治二十年十二月に翻訳は完成し、翌年二月に完成祝賀会が東京新栄教会で行われた、明治五年以来の懸案であった新・旧翻訳聖書の日本語版が十五年を費やして完成しているが、その直前の十八年十一月二〇日に委員を辞任している。

原因は熊二が最も力を入れていたＹＭＣＡ活動への支援活動に対する、ミッションの関わり方で意見の食い違いがあったと思われる(1)。

日本のＹＭＣＡ活動は明治十三年五月東京新肴町の銀座教会で発足したがその端緒は、熊二と同じ船で米国留学をした神田乃武(ないぶ)(2)が明治十二年に帰国後の土産話として、米国のＹＭＣＡ活動を当時の若い基督教指導者に紹介したことによる。

明治十三年大阪で開催した第二回信徒大会の東京の参加者を中心に「東京ＹＭＣＡ」が設立された。発足直後、植村正久、小崎弘道(ひろみち)(3)等の初期のメンバーは各々が教会牧師としての傍らであったため、自由民権運動の様に一般聴衆を前にしての活動を行うには無理があった。、

明治十三年十月から督教の真理を知識層への啓蒙を目的として東京ＹＭＣＡの機関紙『六合(りくごう)雑誌』を刊行。　明治十六年六月からは基督教に関する文化・文芸・思想を中心とした「警醒社(けいせいしゃ)」に引き継がれたが、活動は逆に停滞してしまった。　熊二はこの活動を推進するには、教会以外の独自の拠点が必要と考えていた。

開国以来の横浜、神戸を中心とした信徒の集団は「バンド」と呼ばれる、強い仲間意識が存在していた。　ＹＭＣＡ活動でも東京、横浜と神戸、大阪では活動にはっきりと違いがあった。

大阪ＹＭＣＡが創立されたのは東京より二年遅く明治十五年六月に天満基督教会所属の学生達を中心に設立されたが、それ以前の十三年頃から、学術・宗教演説会と題して毎月開催していた。　土地柄もあり、一度に少ない時で二百名、最大九百名の参加者が記録されている。　その後仏教徒、神道関係者からの妨害があり、多くの聴衆を集める会場探しが困難になっていた(4)。

明治十七年には活動の拠点とする為に、大阪ＹＭＣＡ会館の建設案が浮上、資金調達に神戸在住の米国人宣教師を通じ、英米の青年会からの資金協力を要請した。

これが豪州の同志にも波及し予想外の寄付金が集まった。

明治十九年に大阪土佐堀の旧長州萩藩邸の土地を購入して建設、十一月三日の天長節に奉堂式を挙行した。

このニュースは当然東京にも伝わり、YMCAの立て直しを討議して東京会館建設の策を練ったが「全く熱意が見られなかった」と田村直臣(5)が嘆いていた。

熊本バンドと新島襄による京都同志社の運営を見るように、関西では積極的に外国ミッションの協力を得て、教派を越えた現実的な活動が進められていた。

東京を中心に活動していた横浜バンドの指導者達は、教会の運営に関しても飽くまでミッションの力を借りない、自給自足にこだわっていた為に伸展しなかった。

熊二は小規模でも自前の独立した東京YMCAの施設の必要を感じていた。当時の運営費用は殆どが熊二のポケットマネーから出ていたことを田村が語っている。

東京の指導者達のこの姿勢が、繰り返される教派争いの原因となっていた(6)。

〈日本人による女子教育〉

日本の欧化政策の一翼を基督教の教育機関が果たした役割は決して小さなものではなかった。敬虔な基督教徒で熊二の漢文の師、中村正直が明治六年に設立した「同人社」は、英語を学ぶ過程で基督教への啓蒙に努め、明治十二年には「同人社女学校」も開設した。しかし運営を中村の著述による印税に頼るだけという経営基盤の弱さから僅一年で廃校となり。同人社も明治十六年徴兵令の改正以来男子学生が減少し二二年には解散に追いやられた。

日本の中等、高等教育の法的整備は森有礼が文部大臣の明治十九年三月の学校令によるものであった。明治十五年の官公立の高等女学校は五校しかなく、生徒数も二八六人、同時期の女子の初等教育への就学率は三一％であった。

女学校といえばミッション系が幅を利かせていた時代で、履修科目もすくなかった。卒業後に上流階級層・政府高官の子弟へ嫁ぐ為の花嫁学校程度で、外国人教師が「教えてやる式」の教育で、運営もミッションの言いなりであった。

この体質は熊二が力を入れいたYMCAの活動に対しても同様で、そこには欧米人の持っている日本人への優越感と征服感が強く潜んでいると熊二は強く感じていた。

下谷教会牧師の傍ら開いていた塾の規模が、どの程度であったのかは記録が遺されてないこと不明であるが、西群馬伝導が成功し、精力的に東京YMCAを支援していた熊二に対して、ミッションが名古屋への本格的な伝導活動を依頼してきた。

熊二は日本の基督教宣教師として、オランダ改革派日本伝導局（ミッション）から報酬を受けていた。出石の後輩で塾の書生であった巌本善治の記憶では、明治二十年頃の熊二の報酬月額は五十弗で、為替レートは不明だが当時の水準から日本人牧師二人分の給与であったと語っている。（明治二四年、正岡子規が二四歳の時の給料が月十五円、明治二七年の公務員初任給が五十円であった）

名古屋伝導は決して唐突の事案ではなく、東京大阪に挟まれた名古屋に拠点を置くことはミッションの緊急課題で、熊二の実力を見込んでのことだが、熊二はこれを拒否した。

表向きの理由は月額四五円という給与ではこの中から家賃を払い家族と同居することができないとしていたが、すでに熊二の周囲では「日本人による女子教育」を目指した学校の設立に向けた動きが始まっていた事も理由の一つと思われる。

明治十八年九月三十日に東京麹町区飯田町一丁目七番地に開校した明治女学校は、それ迄国内にあったミッションスクールと呼ばれる女学校ではなく、日本人の教育者による女子教育を目指していた。

創立者は木村熊二で最大の協力者が妻鐙子であったが、残念なことに明治四一年十二月には廃校となっている。

明治女学校の歴史を研究した、日本女性史研究の第一人者者、「青山なお」東京女子大教授は、木村鐙子の研究と夫の熊二に係わる調査研究も進める際、創立者である熊二に関する史料が明治十八年から十九年にかけてはすっかり抜け落ち、全くと言ってよいほど遺されていないと『明治女学校の研究』に記している。

その為この時期の特に、開校に至るまでの熊二と鐙子に関する詳細は不明である。

結婚直後から熊二と交わした書簡の他に、日記も残しているが女学校開設に関しては詳しく記してない。

鐙子は明治十九年八月、コレラに罹患して急死している、鐙子の死後熊二は学校運営から手を引き、後輩の巌本善治に全てを委ねている。

巌本は明治二十年、鐙子の一周忌に『木村鐙子小伝』を刊行。その中で鐙子について語り、彼女の女学校の事業に従事する動機とその決意の根源を記している(7)。

『木村鐙子小伝』の彼女が記したとする日記には、加筆した跡が見られる。

此の日記は明治女学校設立趣意書と共に熊二が巌本に渡したと思われるが、何者かが鐙子の死後運営から手を引く際に、木村家に係わる書類はひと纏めにして取り出し、学校関係の資料からは引き抜いたと思われる。

熊二の遺した資料には欠落した個所が散見される。これについても「木村家に残された他の文書類の状態から推測しても、首をかしげたくなる」と前述の青山なお、が語っている(8)

明治女学校創立の最大の功労者は木村鐙子である。彼女は十二年余に渡る熊二の在米中の留守宅を守り、基督教徒となって帰国した夫の教えを理解して行動していた。

鐙子と長男祐吉は明治十五年十二月下谷教会で宣教師フルベッキから受洗している。幕末の儒学者佐藤一斎の孫である彼女が聡明であることは遍く知られていた。帰国直後に夫が開いた塾の生徒、書生をはじめ下谷教会の信徒や基督教関係者で彼女の世話にならなった者はいないと謂れ、その行動力には驚嘆するものがあった。

明治女学校の創立に関する公的な資料は『旧東京府文書・各種学校ニ関スル書類』として東京都公文書館に所蔵されている。

設置願に書かれている教員名は、熊二の他に、津田梅子(9)人見ぎん、富井於菟(おと)で、他に設立趣意書の中には植村季野、嶋田まさ子、幸田延(のぶ)の名前が見られ、富井に言わせると「何レモ歴々ノ学者」と下谷教会の女性会員達であった。

発起人代表は嶋田三郎(10)で他に、植村正久、巌本善治、田口卯吉の名前がある。嶋田三郎と田口卯吉は府議会の同志で、嶋田は植村正久から受洗した基督教徒であった

入学資格は小学中等以上、修業年限五年、学科目は英語・地理・歴史・動物・植物・鉱物・生理・物理・化学・数学・漢文・修身で家政科目は皆無。基督教への信仰は強要せず、教科書は漢文を除いて、原書または翻訳書を使用していた。

ミッションからの経済援助を受けず、「日本人の儒教精神に育まれた基督教」を目指すことが熊二と鐙子の教育理念であった。

熊二が何時頃鐙子に女学校創立の計画を打ち明けたのか、遺されている資料からは判らないがこの計画の実現には、義弟、田口卯吉の助力も大きかった。

卯吉は熊二の帰国時はすでに著述業に転身、最初に出版した『日本化開化小史』の編集は鐙子も手伝っていた。

その後『経済雑誌』を発刊、東京府議会議員に選出されている。卯吉の妻、千代が病弱であった為に、長男文太の面倒は同じ敷地内に住んでいた鐙子が見ていた。

田口一家が明治十八年本郷駒込西片町に転居した直後、妻の千代が六歳の文太を残して急死暮れには祖母可都が死去している。卯吉はこの頃から両毛鉄道の開発に携わるなど経済界にも進出していた

学校運営は塾の書生で但馬出石の後輩、巌本善治が中心となっていた。巌本は鐙子の信頼も厚く、熊二の書生の傍ら津田仙の学農社でも学んでいた。同じ書生で『経済雑誌』の記者に転身していた西島政之を事務方に据え、長男祐吉も勤務する体制を作った。鐙子は家庭のすべてを取り仕切り、学校創立の準備から運営にと、将に八面六臂の毎日であった。

明治女学校に遺されている資料の一部には、校長木村熊二、教頭木村鐙子と記してあるが、鐙子が女学校で講義を行ったり信仰について語った記録はない。

〈妻鐙子の死〉

木村燈子は明治十九年八月十七日夜発熱し、翌十八日午前十時四十分に永眠している。

この年に大流行していたコレラに襲われていた。発病後自らコレラらしいと考えその夜は家人を遠ざけ、熊二と老婢に看取られた。

翌朝巌本が駆け付け看護に加わると、彼女は改めて巌本に長男祐吉の行末を心配してその気持ちを伝えている。

自分の死を覚悟した彼女は、枕元で熊二と巌本の両人に、聖書の朗読を求め自らも祈り、看護の労を感謝し力尽きて瞑目。享年三九歳という若さであった。

鐙子の死を告げ、葬儀の様子を報じた資料は巌本が編集人の『女学雑誌』に掲載されている。(11)

『木村鐙子の葬儀　基督教会の女傑』

同子の葬儀は一昨日下谷教会の会堂に於いて西教式を以て執行し谷中の墓地に埋葬したり。
当日午後三時より儀を行いひが、其次第を略記せんに、主会は大儀見元一郎氏にて、三浦宗三郎祈祷を為し奥野昌綱聖書を誦じ、巌本善治し鐙子の履歴を演じ海老名弾正氏其志業を賛し、併せて西教の有力なることを述べられ、小崎弘道氏の祈祷を以て儀を終われり、
この間和英両語の弔歌を洋琴（オルガン）に和して歌誦したり、この儀中尤衆人の感情を動せしは巌本氏が履歴の演説にして、同氏は木村氏に深交ありて、鐙子より殆ど生子の如き愛遇を受けたるを以て、其志行を知ること他人の比にあらず、
平生木村氏に交際ある人にして、鐙子が非凡の婦人たるを知る者と雖、此履歴をきき其志気の高邁行状の卓絶にして生死間豪も心を動かさず、人を愛するの念始終一の如くなりしに驚感せり。
埋葬の間石原量氏の祈祷あり、当日来会せし人甚衆く、会堂に溢れて居座なければ、堂外に立ちて此儀に参する人甚多かりき、此皆鐙子生前の愛友なり、
嗚呼木村氏の如きは現時俗界に勢位ある人にあらずして会葬者の盛なる其生前の美行人感俘するによる者多し、同子の履歴は大に世上婦人の志行を励ますにべきを以て逐次之を本紙に掲載すべし。

《明治十九年九月四日の毎日新聞の報道》

〈明治女学校の隆盛とその後〉

鐙子が精魂込めて創立に漕ぎつけた明治女学校は、明治二三年麹町区下六番町（土地の所有者は桜井勉）に校舎を増築移転、明治三十年には府下豊島郡巣鴨に移転し新校舎で多くの卒業生を送り出している。
明治期に設立されたプロテスタントの女子校は六十校もあり、三十年代になると、雙葉学園、白百合学園、聖心女子学院などのカトリックの学校も設立されていた。明治女学校は基督教信仰を強要せず、ミッションから経済援助を受けていないことから、海外のものをそのまま移植してはならないという基本的な考え方があった。外国人のすることならなんでも立派なことだという風潮や、西洋の事など判らずにいた当時の女性たちに対して、「基督教に源泉を持ちながら、日本人が日本人として主体性をもって教育すること」を目指していた。
鐙子の死後、熊二は巌本に運営を任せて学校運営から手を引いた。巌本が正式に校長に就任したのは明治二五年で、明治三七年まで在職していた。
二代目校長の巌本善治は『女学雑誌』(12)を通じて「真の社会改良・道義の樹立は女子教育で、その教育の基礎としては特定の宗派に属しない基督教信仰と自由平等の精神を原理とする」と主張した。
この考えは当時の時代の先端をゆく進歩的な女生徒達や、文学に憧れる女学生たちに受け入れられ、西洋文化の押し付けのような基督教の教育に疑問をもち転校してくる生徒も現れていた。
講師陣に雑誌『文学界』の北村透谷、島崎春樹、星野天知らを擁し、授業内容も芸術と恋愛を承認するロマンチックで華やかで、自由闊達な独自の雰囲気が作られた。
最盛期は寄宿生を含め在校生が三百名を超えていた。主な卒業生に羽仁説子、野上弥生子、相馬黒光（旧姓、星良）がいた(13)

〈再婚と周囲の評判〉

本格的に明治女学校の開校に着手する為に熊二は下谷教会の牧師を明治十八年三月に辞任している。これは女学校の創立事業がミッション系の女学校に対しての妨害行為と取られかねず、ミッションに対して名古屋行きを拒否したこともあり、これ以上の摩擦を避ける為でもあった。
妻を失い、気落ちしている熊二に対して、周囲には、同情する人々も多くいたが、基督教関係者の中には、批判する雰囲気もあった。自身も帰国後に家塾を始め、群馬、長野への伝導活動や青年活動への支援をしていた頃の熱意を失っていた。
熊二に対する批判は気分屋で、飽きっぽく、頑固者でなかなか人の言うことをきかないといわれていた。その根底には、他の日本人宣教師よりも多額の給与を受けている事への妬みもあったと思われ、遺されている資料だけでは熊二の心情を知ることは難しい。ミッションの外国人伝導者との間の様々な利害を含んだ軋轢が立ちはだ買っていたことも事実である。

明治二十年四月二九日麻布教会で海老名弾正の司式で伊藤花十九歳と再婚している。福井藩儒臣伊藤輔（たすく）の娘とどんな経緯から再婚に至ったのか不明で　日記には、『訪井上簾午後開結婚式海老名弾正行其式会者桜井田口夫婦海老名夫婦伊藤氏』(15)と記されているだけである。

明治女学校関係者と鐙子の遺影を中心に熊二と花が写っている集合写真が遺されている(16)。熊二と伊藤花との再婚に関する詳しい史料は遺されていないがこの結婚に対しての周囲の評判は芳しいものでなかった。伊藤花とはその後離婚していることから、熊二自身の手により　関係する文書、資料は破棄されたと考えられる。（日記には花、花子、華子とも記されている）

前述したように熊二の日記は資料④発表の後、小諸市中棚の水明楼に遺されていた史料を基に研究がおこなわれ、資料⑦を刊行している。その際、青山なお教授が「まるで宝の山に入った気持ちであったが見事に裏切られた」と言わせ、明治十八年一月から明治十九年十二月迄の熊二の行動に関する資料は遺されていない(14)。

それ以前の十七年六月から九月迄の日記は金銭出納とメモ書き程度であり、十七年の十月から十二月迄は英文の記載になっていて内容も、二十年一月以降の日記とは違い、やはり金銭に関する記載が多く日記とは言い難い。

〈教派の争いとＹＭＣＡ活動〉

鹿鳴館時代と称される、明治二十年首相官邸で開かれた大仮想舞踏会は、行き過ぎた欧化政策として国民からの非難を浴びた。此の気運は日本の基督教界全体にも向けられていたが、プロテスタントの教派間の争いは収まる気配すらなかった。

下谷教会を明治十八年三月に辞職し、二一年二月の台町教会牧師に就任する迄は、熊二は教会牧師としての活動はしていない。

この間に一致教会派と組合教会派は合同に向けて、二一年一月から二月にかけて東京と大阪で協議を続けたが成功せず、東京を中心とした十九の教会による東京第一中会が構成されたことで、かえって問題は複雑化していた。

熊二はこの中会と呼ばれるメンバーからは外されていたが、この合同に向けて、調整役を務めていた井深梶之介(17)と書簡による意見交換をしていた。

その内容を読むと東京ＹＭＣＡ活動で、関西を中心にした組合派と熊二が親しくしていたことに対して、ミッションから圧力がかかっていたことが判る(17)

明治二一年五月の一致教会派の会議では三人の外国人宣教師に終始リードされ、その中の一人は、オランダ改革派の事実上の代表者アメルマン氏で、熊二の明治女学校創立に不快感を示し、名古屋行きを命じてきた人物である。

明治女学校の創立準備を進めていた時期でも熊二は、東京ＹＭＣＡ活動は重要な活動と考え継続していた。既に大阪ＹＭＣＡは活動の拠点とする会館を海外のＹＭＣＡの協力と寄付金で建設していた。

この活動は北米ＹＭＣＡの機関紙に報道され、関係者の間で注目を浴びていた。明治二一年二月二十日には米国のミッションと北米ＹＭＣＡが海外教師派遣委員会を組織、委員長のＪ・Ｔスウィフトが視察を兼ねて来日した。

三月三日の日記には『在寓午後訪青年会スウィフト来館親睦会あり』と記され、この時の通訳は熊二が勤めている。

スウィフトは米国での募金活動の為に翌二二年三月に一度帰国し、十一月四日には夫人を伴って再来日。積極的に東京ＹＭＣＡ活動の指導に当たった。しかし彼の行動はアメリカ人の合理的主義によりトラブルが絶えなかった(18)

熊二はたとえ小規模でも活動拠点となる会館の建設を目指していた。

東京府下の各協会と青年会の横の繋がりを活発にするため『青年会演説集』を刊行して資金に充て「東京伝導学校」(19)の開設に合わせ組織の充実を図った

銀座の京橋に事務所を間借りしていた東京ＹＭＣＡは、東京の中心部に土地を購入することは不可能と判断し、神田美土代町に五百坪、時価八六七円で建設地を入手したがそこに至るまでは紆余曲折が多く、熊二は常にその渦中であった(20)。

この活動で自分の収入からも資金提供したが、それにも限界があり、友人知人から資金を借り、その返済に窮して家財を売却する羽目になってしまった。

最初に決めた神田の場所は、価格が安く既に建物が建てられていた、これにスウィフトがクレームをつけ一旦白紙に戻した経緯がある。

スウィフトは自身が集めた寄付金額以上の準備金を要求して来た。その為に熊二は銀行から借り入れを起こしたがその手法にも介入してきた。

再来日後は、日本語が堪能でないスウィフトにミッションの意気のかかった人物が通訳として付き添っていたことから問題が起きていた。

合同問題が不調に終わった影響もあり、横浜バンドと呼ばれる人々からの協力は得

られず、協力者も基督教に理解がなく、熊二は彼らを「まるで山師のような輩」と語っていた《21》。会館は明治二三年十一月二四日に完成した。

しかしその数か月前に熊二は運営から手を引いている。この行動が熊二の飽きっぽい性格と批判されるが、実態は少し違っていた。

東京YMCAに多額の寄付をした北米YMCAの中枢は、メソジスト（美以派）と呼ばれる英国から派生したプロテスタントの一派で、日本での初期からの信徒には幕臣時代からの畏友である津田仙がいた。

津田の開いた農学社には巌本善治を始め多くの知人が学んでいたが、熊二のオランダ改革派とは「教育と信仰」の解釈とその実践方法で、当時はお互いに相容れられない部分があった。熊二は日本のYMCA活動でお互いの摩擦を避ける為に自ら手を引いていたと思われる。

明治二一年三月、私立頌栄女学校で教鞭をとっていた熊二は九月から校長に就任した。《22》

この学校の創立者の岡見清致（きよむね）とその一族は旧中津藩の出身で、大崎、芝・品川に広大な土地を所有し、自宅の敷地内に教会を設置するほど敬虔な信者で福沢諭吉の後援者であった。明治女学校を創立した熊二の教育方針に賛同し学校運営への助力を依頼して来た。

明治二一年から台町（高輪）教会牧師に就任、毎週日曜学校を開催して、信徒と向き合い、YMCAの伝導学校や数個所の教会を掛持ちして忙しい毎日が続いていたと思われる。

明治二一年四月二日から六月三十日までの日記は別帳に記す」とあるがその日記は遺されていない。忙しくて記さなかったのか、日記帳が紛失したのか不明である《23》。

若い頃から熊二は暑さに弱く、米国留学中も体調を崩すことが多かった。

学校の夏休みを利用して同年年八月三日から二四日まで、千葉・木更津の矢那村に花を伴い避暑を兼ねて滞在している。熊二の体調を心配した岡見家の配慮によるものと思われるが、この時の様子は『矢那村日記』と題して記されている《24》

台町牧師の就任式は、九月二二日に慌ただしく行なわれた。住居を「二本榎六二番地」に移し、十二月十九日には「高輪南町五三番地奥平邸」へと転居したことが記されている。

この後「明治二一年十二月三一日から同二二年四月一日」までの日記も遺されていない。

小山周次の著した資料によると、頌栄学校以外にも明治女学校創立以前から、東京府内の商業学校と成立学舎の他に、開成中学・学習院・明治学院でも教鞭を執っていたことがわかる《25》

一致教会と組合教会の合同問題で揺れ動いていた時は、両派の調停委員一致派の井深、組合派の小崎と頻繁に書簡で情報交換をしていた。

特に小崎はYMCAの活動での熊二を高く評価し、家財を売却してまで資金を立て替えていた熊二に尊敬の念を抱いていた。

年齢差のある妻の花との家庭生活も円満とは言い難かった。長男祐吉は巌本の下で学務員として働いていたが長続きせず、田口と西島が面倒をみていた。

時々ふらりと家を出るような生活で経済的にも決して余裕のある生活でなかった。

今では考えれないが当時の士族階級では経済的に余裕がなく、どん底生活をしていても書生や使用人を抱えるのがプライドであり「武士は喰わねど、高楊枝」などといわれていた。花が若いだけに今でいう家政婦が同居して家事を賄っていた。

明治二二年六月四日熊二は過労と腸カタルで入院している。幸い大事には至らず二週間ほどで退院した。この年の夏は千葉の市川で転地療養を兼ねて休養、帰京後も自宅で過ごすことが多く日記の所々に漢詩、和歌の記載が見られる。

九月一日、西日本・福岡、近畿の和歌山・奈良を襲った水害に、YMCA活動の一環として義援金を送るなどしている。体力の問題もあり専ら九月に築地に開校した「東京伝導学校」と青年会活動の機関紙の刊行に力を注いた。

〈新島襄の死と神戸への転籍問題〉

東京中会から疎外されていた熊二に、二二年十二月四日に小崎弘道からの書簡が届いた。手紙の内容は不明であるが、遺されている他の資料から推測すると、合同問題は、小崎の所属していた組合教会の熊本バンドと呼ばれるグループ内も一枚岩でなく、同志社の新島襄が合同案に対して慎重であったことから、熊二に神戸での活動を依頼したものと思われる。

この合同問題で新島も熊二も東京中心の日本の基督教伝導には既に限界を感じていた《26》

明治二二年に大日本帝国憲法が発布され、東海道線の神戸・新橋間が全通、近代

国家への道の一つに鉄路の開発が不可欠であることを米国留学の経験から強く感じ取っていた。
二人の共通点は日本を離れるまで基督教の事は殆ど理解していなかったことで、現地へ行ってから、米国々民の基督教への取り組みを肌で経験し、自ら入信していたことである。
渡米前は同じ蘭学塾(田辺の塾)で学んでいた新島は、留学後アメリカンボードと言われる新興の教派に入信したが、此の教派も信者の多くは西海岸まで到達した、開拓時代の苦労を経験した人々であった。
新島より後になって、渡米した熊二は数か月前に大陸横断鉄道が全通したばかりの畔ミシガン州のハーランドでオランダ系の移民が開発した肥沃な土地で彼らの信仰心に接していた。
二人より若い明治政府の指導者達は、日本で基督教に触れてから留学しているが、受け入れるアメリカの国情も大きく変化していた。
此の頃になると、プロテスタント(新教)のオランダ系移民の組織力は以前ほどでなくなり、フランス系・イングランド系の移民が多く住むカナダに本拠を置く、メソジストに財力が集まっていた。
熊二が小崎からの書簡を受け取った翌月の明治二三年一月二三日新島がこの世を去った。 新島襄の危篤を知らせた明治二三年一月の日記が遺されている。
『廿日(月) 在寓夕芝公園三緑亭民友社員と集会帰宅新島襄氏病危篤の報あり
教員吏集合』
『廿一日(火)新島危篤の電報大磯より通す直に上途十二時大磯百足屋へ到着氏
〈面接 午後三時二分大磯発富田鉄之助氏と同車帰京〈略〉』
『廿三日(木)夜十時新島氏の凶訃電信来ル嗚呼氏ハ吾か十七八歳の頃より学友
たり今や溘焉として(急にだまって)逝ク』《27》
新島は京都に同志社を設立した後は、北海道を中心にした新たな布教活動を計画していたが熊二と会ってこの思いを語り合うことは出来なかった。
鐙子の死去以来、周囲には死別する友人知人が増えていた。
若い頃に師と仰いでいた山岡鉄が明治二一年七月に五三歳の生涯を閉じている。
最も心を痛めたのは米国留学の恩人、森有礼が四二歳という若さで、明治二二年二月十二日に凶刃に倒れたことである。
彼が最も期待していた帝国憲法が発布され、法治国家への実現に近づいた時の出来事であった。 同年十二月には義母田口町子がこの世を去っている。
小崎からの書簡は偶然とは言え、新島の死を予感していたのかと思えるほどであった。新島亡き後の関西同志社グループの中心人物は小崎だが、彼は霊南坂教会の牧師で在京の身であった。
小崎からは前年にも依頼があり一度は神戸教会を訪れ、最終的な判断をする為に熊二は、明治二三年二月二十日単身神戸に向かった。
『午後十二時三十分三の宮へ着、神戸協会々来迎。山本通六丁目四拾九番地
橋本伊左衛門方へ着教会老婦人来訪接待殊ニ厚し』と歓迎を受けた。
翌日からは旧知の星野光多も加わり、教会での講義、英和学校で講演などの多彩な日程を消化し十日間滞在した。
三月六日には山口県に向い『午後五時頃山口へ着訪新道教師館ベッキと同寓、ベッキ氏夫妻待遇甚厚』ベッキ夫妻は留学中(ニューブランズウィック時代)の知人で山口高等中学で英語教師を務めていた。 この時は旧交を温めながら、教会伝導等の件で相談したと思われる。
基督教に理解のあった文部官僚・森有礼の死は基督教界に大きな影響を及ぼしていた。 特に外国人英語教師の多くが宣教師を兼ねていた為、官立の教育機関からは排除され、多くは私立かベッキ夫妻のように地方の公立に再就職していた。
三月十五日に再び神戸に戻り、途中静岡に立ち寄り一泊。 三月十八日に東京に戻るという約一ヶ月に近い関西への旅であった。
四月十一日付で神戸教会へは就任承諾の手紙を出し、二九日には神戸教会執事の飯田勇記氏から正式な依頼状が届いたが、ことは順調には進まなかった。《28》
四月二三日には辞任の意向を周囲に示し、おそくとも七月には神戸への転籍を希望していたが、台町牧師である為に当然辞任しなければならなかったが教会関係者からは、思い留まるように懇請されていた。
五月二一日には神戸から飯田勇記が上京し熊二と面会している。 会談の内容は日記の記載ではわからないが、最終的に熊二は神戸転籍を断念した。
理由は給与問題と思われる。当時の収入に関しては以前記してあるが、神戸での収入では熊二の借入金を返すのが苦しいと判断したと思われる《29》。
一致教会内部では熊二の神戸転籍行動に批判が出ていた。

帰国後も一致教会で行動を共にしてきた大儀見元一郎は既に長崎の教会へ赴任し、熊二は教派内で孤立していた。

合同問題が不調に終わった一致教会は正式名称を日本基督教会と変更した。念願のＹＭＣＡ会館は十一月二三日に完成しているが、日記にはそれに関した記載はない

【注】

1 資料⑤Ｐ―２０６・２２４

2 神田乃武（かんだないぶ）安政四年～大正一二年　能楽師　江戸生まれ
明治四年米国　留学（熊二と同船）十二年帰国、東大予備門英語　教授、東京外国語大学、商業（現・一橋大）で教鞭を執りローマ字の活用を提唱、日本ＹＭＣＡの創立者でもある

3 小崎弘道（高等おざきひろみち）安政三年～昭和一三年　熊本藩士　翻訳家、熊本バンド、熊本洋学校から同志社英学校卒、新肴町教会設立、YMCA　初代会長、基督教新聞刊行、「警腥社」創設同志社総長、赤坂霊南坂教会牧師、日曜学校を提唱、「青年」「宗教」を翻訳

4 資料⑤Ｐ―２１８

5 田村直臣（たむらなおおみ）　安政五年～昭和五年　幕臣与力、大阪生まれ
海軍兵学校から築地大学校で学ぶ、明治十五年米国留学、十八年数寄屋橋教会牧師
日曜学校による児童向けの基督教啓蒙に勤め、「日本の花嫁」社会問題を提起している

6 田村直臣著「信仰 50 年史」Ｐ７５）

7 資料③巻末所収

8 資料③Ｐ-４７８

9 津田梅子（つだうめこ）元治元年～昭和四年　幕臣津田仙の次女　津田塾大創立者
明治四年七歳で米国留学、同十五年帰国、伊藤博文に乞われて「学習院女学部」で華族子女を指導、父津田仙と熊二は旧知で、明治女学校創立の趣旨に賛同して教師となる。
明治二二年再度米国留学、明治二五年帰国後、女子高等師範教授、同三三年女子英学塾（現・津田塾大）を創立
＊富井於菟（とみいおと）慶応二年～明治十八年　播磨龍野の生まれ
日本最初の女性新聞記者　婦人解放問題で鐙子に共感、、腸チフスに罹患
実質の勤務はしていない

10. 嶋田三郎（しまださぶろう）嘉永三年～大正十二年幕臣鈴木家三男　衆院議員
沼津兵学校大蔵省付属英学校卒　明治七年横浜日日新聞記者、十五年嚶鳴社、立憲改進党議員、衆議院十四回当選、植村正久から受洗、廃娼運動、足尾鉱毒事件運動に係わる

11.（資料③Ｐ―４０３～４０４

12.『女学雑誌』明治十八年七月から三七年二月迄五二六号・五四八日本初の本格女性誌、明治女学校の巌本善治が編集を務め。二二年頃までは啓蒙的で、巌本と結婚した若松賤子が寄稿するロマン主義の文芸作品、明治文学の代表的な島崎藤村等の作品を掲載していた。
明治三七年廃刊している
＊若松賤子（わかまつしずこ）元治一年～明治二九年会津藩士松川勝次郎の長女
フェリス和英学校一期生卒業後同校で教鞭を執りながらバーネットの「小公子」を翻訳し文壇にデビュー、明治二二年巌本善治と結婚、明治女学校で講師の傍ら「女学雑誌」の中心的執筆者となる。

13. 羽仁説子（はにもとこ）明治十一年～昭和三二年日本初の女性ジャーナ孫リスト　青森県生れ
明治女学校卒後『女学雑誌』編集者、明治三十年報知新聞記者、四十一年『婦人之友』創刊、大正十年自由学園創立　娘・説子は議員、その婿が羽仁五郎　映画監督羽仁進曾孫にエッセイストの羽仁未央がいる
＊野上弥生子（のがみやえこ）　明治十八年～昭和六十年　小説家　大分県生まれ
夏目漱石門下のプロレタリア文学者芸術院会員、文化勲章受章　法政大学名誉教授
＊相馬黒光（そうまこっこう）明治九年～昭和三十年　旧姓星良、仙台藩士星喜四郎三女　宮城女学校から横浜フェリス女学校を経て明治女学校に入学、明治三一年長野県安曇村出身の相馬愛藏と結婚明治四二年新宿中村屋創業、島崎藤村とは妻秦冬子と仙台時代から交流があった

14. 資料③Ｐ―４７８

15. 資料⑦Ｐ―１０１

16. 資料③口絵

17. 井深梶之介（いぶかかじのすけ）嘉永六年～昭和十五年　会津藩士、元白虎隊士
明治六年ブラウン塾で受洗　東京一致神学校１期生、麹町教会牧師就任　二三年から米国留学二四年から明治学院総長　ミッションと日本人牧師の調停役、日本基督教教育同盟会々長に就任『井深梶之介とその時代』参照

18. 資料⑦Ｐ―１１０・１２９

19. 「東京伝導学校」 明治二二年九月築地一七番地に「修業年 限二ヵ年、学歴制限なし二五歳以上で受洗後一年、各教会の保証があれば誰でも入ることができ月謝は無料、学資支給制度有で開設した速成伝導者養成機関、校長田村直臣、理事を井深梶之介、石原保太郎、ノックス、アメルマン等が務めたが、他の指導者から協力が得られず、明治二六年六月には廃校になっている。

20. 資料⑤P―229

21 資料⑤P-244参照

22 「頌栄女学校」明治十一年岡見清致が品川青物横丁の自宅敷地に教会と併設した頌栄小学校を開校、翌年頌栄女学校となる、大正九年高等女学校に昇格、現在は港区白金台の基督教系の女子中高一貫校

23 資料⑦P―110

24 同 P-112

25 資料①P-14

26 資料⑤P-248

27 資料⑦P-132

28 資料⑦P―136

29 資料⑤P-250

《Ⅵ》【ふたたび神の道に導かれて】

〈信仰と教育の迫間〉

熊二が神戸への移籍を思い立ったもう一つ理由には家庭の問題があった。常に熊二の相談相手であった、実兄勉は、十一月に徳島県知事に赴任。 もう一人の理解者、義弟の田口卯吉は事業拡大の為に七月には南洋視察に出かけるなど活躍していた。 勉には恒次郎、卯吉には文太と武次郎という子供がいた、既に自立の道を歩んでいた。 熊二は生涯家庭というものには恵まれていなかった。

長男祐吉は、幼少期は父親が不在の家庭で育ち、親子同居の生活は鐙子の死により僅であった、 熊二の帰国後、祐吉は京都同志社英学校に入学、寄宿先は横井時雄の所であったが、一年余で退学している。 その後書生の西島政之と共に家塾の仕事を手伝っていた。

明治女学校開校時は鐙子の依頼で巌本善治が面倒を見ていたが、気分屋で長続きしない性格といわれていた。 母親の鐙子は死の直前にも、巌本に祐吉の行末を案じて面倒を見てくれるように懇願していた。 だが巌本が先輩である熊二に本当のことが言えず、結果的に本人を甘やかす結果となっていた。

熊二が伊藤花と再婚した直後は女学校職員として在職、田口一家が新築移転した跡の旧宅に住み、熊二の所と往来し、自由気儘な生活に陥り遊興にふけることが多くなっていた。

「怪我の痛み止め」というのは言い訳で、当時流行していたモルヒネ中毒に陥り時々訪れては熊二から、小銭を強請していた。

明治二三年十二月一日の日記に熊二の自宅に盗賊が侵入、盗んだ日本刀を振りかざす賊に隣室にいた祐吉が短銃で応戦しその時足に怪我を負ったと記されている。

犯人の二人は逃走、翌朝から警察の捜査が行われたがこの記述には辻褄の合わない部分がある。 盗賊が使用した凶器は木村家が所蔵していた國次という伝来の日本刀で、翌年の一月二三日邸内の藪の中から発見され、家人が警察に届け出たが、発見した時祐吉は外出中でその後行方をくらましている。

これは当時よくあった、狂言強盗という手口で、犯人は祐吉の知人で、熊二の自宅や隣接する田口の所から家財を持ち出し、換金して分け合い祐吉はモルヒネを買う

資金にしていたと思われる。

この事件より前の、十月五日に田口の旧宅に盗賊が入った時、祐吉はその時同じ敷地内にいたはずであるが外出していたと証言していた。犯人は捕まっていなかったが、当時の警察は被害が軽微であれば、被害者の社会的地位や名誉を重んじ、深く追求しないのが常であった。

其の後も祐吉は友人、知人、親戚の所を訪れ寸借詐欺を繰り返しその都度熊二が返済していたが、ついには法的処置に訴えられ執達使が差し押さえに来る騒ぎとなっていた。見元保証人の熊二は返済に窮し、明治二四年五月には高輪の自宅の売却を考えるほど追い詰められていた。

祐吉のモルヒネ中毒は発狂寸前の精神異常を来し、奇行を繰り返していた。その不行跡は熊二の人生を大きく変える原因となり、遂には伝導委員を辞任、論説を投稿していた警腥社の委員会にも参加しなくなっていた。(1)

熊二の遺した日記は日々の行動記録が主で、時に短歌、漢詩が織り込まれることはあるが、他人への誹謗中傷は殆どなく、まして愚痴めいた記載はない。しかし明治二三年暮れから二四年の夏にかけてはさすがに生活に窮し、嘆きの言葉がにじみ出ている。

若者たちへの基督教信仰への道を説きながら、己の子供への愛情の注ぎ方に躊躇する自分の姿に絶望し、解決の糸口がみつからない日々が続いていた。

妻の花は祐吉と折り合いが悪く、職業学校へ通うという名目で実家の伊藤家に一時を約して帰り、家事の面倒は下碑を雇っていたが、体調のすぐれない日々が続いていた。

塞ぎこんでいる熊二を心配して訪ねてくる友人・知人のなかに上田龍雄(2)という男がいた。大崎にある津田仙の「学農社牧場」で働きながら、新栄橋教会の長老(信徒の代表者)を務め熊二の台町教会にも顔を出し、熊二の説教に耳を傾けていた。

上田龍雄は信濃国南佐久郡居倉村(現・川上村)豪農の生まれであった。上田家の遠祖は、熊二の生家桜井家と同じ仙石秀久の家臣で、仙石家が信州上田から但馬出石へ転封する際、佐久郡に土着した武士の家系、佐久郡十二ヶ村の取締役であり苗字帯刀を許されていた。

上田は維新後、山梨県甲府裁判所判事を勤めたが基督教に入信。郷里での殖産興業に専念する為に学農社で学んでいた。

もう一人は新栄橋教会の石原保太郎(3)で、石原は按手礼(洗礼を授ける資格)を得る為に、熊二が設立した築地の東京伝導学校で学んだ第一期生である。資格取得後は巡回伝導となり、ミッションから嘗て熊二が訪れた信州の伝導を依頼され相談に訪れていた。

上田や石原との会話では当然信州の様子が話題になっていた。会話の中で思い出すのは帰国直後の伝導で訪れた信州での情景であった。

小諸城址に在った勝海舟の題字と中村正直の撰文による記念碑を訪れた事や、その夜に熊二の所を訪れた若者達とのひと時が鮮明に甦った。

明治二四年六月十二日に中村敬宇(正直)が五十八歳でこの世を去っていた(4)。八歳で江戸へ来た直後の熊二を昌平黌で学問の道に導いてくれた恩人で 中村と熊二は新たな漢文の教科書を共著し、明治女学校をはじめ頌栄学校、明治学院でこれを教材に使用していた。

同じ頃に明治学院の二人の若者が熊二の所を時々訪れていた。小諸出身の関友三(ゆうぞう)(5)と木曽馬籠宿が実家の島崎春樹(後の島崎藤村)である。

島崎の名前は明治二一年暮れに二本榎から高輪に転居した頃の日記に初めて記載されている。その後明治二四年五月に体調を崩して高輪の自宅で療養している熊二を見舞いに訪れていたことが記されている。

〈秋の小諸を訪れる〉

明治二四年八月十九日に心労から腹膜炎をおこし、一週間ほど入院した。

妻の花は駆け付けているが祐吉は行方不明のままであった。日記の文面から会話の内容はわからないが、病状が落ち着いてきた頃に誰ともなく、転地療養も兼ねた気晴らしの旅行を薦めたと思われ、明治二四年十月十日から花を伴って信州へ旅行に出掛けてた。

目的地は十六年七月の西群馬、信州への伝導で訪れた小諸で、案内役は明治学院生で小諸荒町出身の関友三が務めた。関の実家は維新後から馬車鉄道の会社を運営していた。

十日の朝八時二十分に品川からの列車で午後一時横川に到着、その日夕刻四時には軽井沢に到着、十六日まで旧軽井沢の佐藤万平方に滞在している。

その間には群馬の横川から碓氷峠を越えて信者が訪れて来た。
十五日には、軽井沢の信者の紹介で発地を訪れるが、養蚕に忙しい時期で伝導をあきらめている。
十月十七日午後小諸に向け出発、三時には、関友三の実家、小諸荒町の関五太夫方を訪れている。
日記には小諸の秋を満喫した様子と、関家の厚意に感謝していたことが記されている
『十八日(日)快晴　十二時半小諸を相発して布引山を訪ふ帰来疲甚〈略〉』
『十九日(月)快晴　朝訪近街午後訪菱野之浴山間之黄葉愛翫すへし』
『　廿日(火)快晴午前在寓午後訪湯之瀬鉱泉筑摩川の中流より出るといふ泉微温浴に堪べす夜教会堂へ出席祈祷会を開く会者拾弐人』
『廿一日(水)美晴終日在寓閲古書午後散歩市街〈略〉明朝発程之用意せり主人』
『廿二日(木)美晴朝出発すへき処主人媼之厚意二従ひ滞在する(こと)となりぬ主人媼意を尽くして厚待セリ夜雨』
十月二十三日午後は汽車で軽井沢に向かい、再び佐藤万平方に止宿、翌日は横川で明治十六年の伝導で訪れた安中教会の信者達との再会を果たした(6)
東京からの鉄路は明治十八年に横川迄が全通、この時は新道が開かれ馬車でも越えることができた。

〈信州への移住を決意する〉

「竹の雨、松の嵐を友として　みと世はいつか夢となりぬる」
「しばしとてとどめかねたる駒の足　今宵四十路の関を超すらん」
明治二四年十二月三一日の日記の末尾に記した句である(7)。帰京後十一月には徳島に赴任した兄勉に書状を送り、信州へ移住する決意を伝えたと思われる。
十一月二八日の日記には『朝築地神学校へ出席伝導委員会を開く午後二時より同断信州へ在住之事承諾す』とある。十二月六日に台町教会へ辞意を表明、十六日の信徒総会で承認されると、
十二月二六日に開かれた伝導委員会では日本基督教会派遣牧師として、長野県南佐久郡の在住伝導を正式に依頼された。その結果、巡回伝導で南佐久郡を担当していた石原保太郎が新栄教会から台町教会に移り、台町教会の熊二が南佐久郡に在住で伝導を行うことに決定、年明け早々に信州へ向かうため、暮れには荷造りを終了している。
熊二が信州へ移住する契機は、上田龍雄と佐久を巡回伝導していた石原保太郎から信州の様子を聞いていた事と関友三の激励を受けた為など、何れも周囲に薦められて決心したという説が有力であるが、熊二の心の中には他に期するものがあったのではないだろうか。
熊二の生家出石桜井家は遠祖が信濃武士桜井氏で、上田から出石に転封してきたことは幼少期から教えられていたと思われ、米国留学の際に変名を「佐倉定吉」と名乗っていることからも推測できる。
最初の地方伝導活動を群馬から小諸を経て長野県内を選んだことも、偶然ではなく熊二が希望して実現したとも考えられる。
帰国後の熊二は実兄桜井勉からの依頼もあり、出石の主家で東京在住の仙石政固(まさかた)の所を訪れている。上田に滞在した時には仙石氏の末裔という人物が訪れ面会した事や、佐久に居住してからも桜井氏を名乗る佐久の人物との交流が日記に散見される。
妻鐙子の死により、女子教育育の世界からは一度身を引いた形となっていたが、信仰と教育に携わる意志を捨てたわけではなく、新たな道を模索していた
熊二が創立した小諸義塾に教師として赴任し、後に作家となった島崎藤村も信州木曽の出身である。
二人の最初の出会いは藤村(当時は島崎春樹)が三田英学校から明治十九年九月共立学校に入学した時に遡る。英語を教えていた熊二が　教材に米国の新進作家H・アーウィンの作品『スケッチブック』の原書を使用していたことに感銘を受け、其の後も親密な師弟関係が築かれた。
文学で身を立てようとした藤村は巌本善治の主宰する『女学雑誌』に寄稿、編集を手伝いながら、講師として明治女学校の教壇にも立っていた。
明治二一年六月十七日、明治学院在学中高輪の台町教会で熊二から受洗したとされている(8)　一時期藤村は熊二の所に下宿していたこともあり、熊二が長男祐吉の代わりに養子に迎えようと思うほどの交流があったと伝えられている。日記には頻繁に『島崎来ル』『島崎訪』と記されている。

明治二一年の熊二日記には『四月二日ヨリ六月三十日の日記別帳に記す』とあるが、別冊の日記が発見されていないことから それ以上の事はわからない。

熊二の胸中を考えると、「自らが決意した遠祖の地佐久への移住」と考えたい。

〈佐久の風土と基督教〉

明治十六年に西群馬伝導の後信州を訪れているが、佐久に足を延ばすのは初めてであった。 信濃国佐久郡は小諸、岩村田、田野口の三藩の他は幕府直轄地と旗本領の郷村が散在していた。 廃藩置県後の佐久郡は六十ヶ村、北佐久が一町七六ヶ村に分かれている。

明治十九年長野県が調査した「群別小作地と小作率」によると県内で最も小作地率の高いのが佐久郡で、南佐久郡は県下最高の小作地率で「水田58，3％、畑44，0％」北佐久が「水田51，6％、畑48，6％」。 地主的土地所有者が最も発達している地域で、県下の大地主十人のうちの四人までがこの佐久地方の大地主であった(9)

同じ佐久郡でも南と北では土地の気風には違いがみられた。 既に巡回伝導で佐久を訪れていた石原保太郎と南佐久出身の上田龍雄から佐久郡下の情報を得ていたと思われる。 熊二は嘗て西群馬伝導が成功した要因を、地方伝導振興策と題してミッションに報告している(10)。

一、地方の人情習慣を理解し、機に臨み変に応じ活動する
一、地方の有力者と親密なる交際を為すこと。
一、土着の人を信者として収容すること。
一、衆多の中には代言人(弁護士)医者、伝道者は家庭には禁物だという者も有るが、概して家庭伝導は一家集合して談話するので有効である。 炉を擁して談話する事は何人も好むところ、かくして蒔かれる種は有効なり。
一、基督教説教よりは直に聖餐を説明する事 病人は病理を聞くより病の癒ん事を欲す。
一、日曜学校(児童を収容すること。

佐久伝導はその対象を地主、商人、医師、教員等として、子供を英語塾に通わせるようなインテリ層、町村の有力者層にターゲットを置いて伝導を行った。

南佐久には西洋式城郭の五稜郭を築いた田野口藩が幕末に立藩されている(11)。郡内に散在していた幕府領では、一部の富農達が文政年間から「丸佐組」と称する商人仲間を組織して江戸の旗本、御家人を対象に、上田紬はじめ近隣の絹織物を売り捌く、江戸商いを行っていた。 彼等は開港後の横浜では生糸取引の促進を諮り、明治六年に横浜為替会社、八年には県為替方の「彭真社(ぼうしんしゃ)」(12)を設立している。

この地方の知識階層は「国学平田派」の門人が多く、教育に対しても関心があった。明治八年僅三百二十戸の一寒村、下中込村に擬洋式の「中込学校々舎」を落成させている。発案者は村の用掛の若者、小林豊次郎(13)、同村出身の米国で建築を学び帰国したばかりの市川代治郎(14)が設計施工を請け負った。当初の計画より費用が嵩んだが、村外の篤志家からの寄付もあり明治八年十二月に落成した。

多額の建設費に反対もなく建設されたのは村民の教育に対する関心の高さの表れである。校舎は「ギヤマン学校」と呼ばれ、その後中込町役場としても使用され現存している。(時期に松本開智学校が建てられているが是より四ヶ月後である)

北佐久に位置している岩村田藩の内藤家六代藩主下総守正縄(まさつな)は老中水野忠邦の実弟で、平田派の国学を重聴し、藩内には尊王攘夷思想が広まっていた。

京都で起きた「足利三代木像梟首事件」の中心人物であった角田忠行(15)は長土呂村の出身で平田派国学の信奉者として知られている。

戊辰戦争時の東信濃を騒然とさせた「赤報隊事件」(16)。北信分遣隊隊長は春日村出身の桜井常五郎で、隊員の多くは佐久郡内の出身者であった

佐久郡下で最初に基督教に接したと思われる人物に、水野丹波保冨(やすとみ)・保穂(やすほ)の父子がいる。 父の保冨は、その出で立ちから「赤い陣羽織」と呼ばれ、熱烈な勤皇家で知られていた(17)。 息子の保穂は安政三年に生まれ、平田派の国学を学んでいたが維新後上京して、基督教の理論的根拠を探るために英語を中村敬宇の同人社で学んだ、その後、英国福音教会で聖書研究を始めると却ってその神髄に感銘、ライト宣教師から受洗している。 明治十四年からは伝道師となって、神戸・大阪で活動を行い、

神道・仏教・耶蘇の大意を著した『明迷烏の覚醒』を執筆し自費で刊行した。この著書は後に教会の公的出版書となっている。その後水野功と改名し、カナダ聖公会教会牧師として活動しているが。水野功が佐久に戻り伝導を行ったという記録は遺されていない。

〈絹の道と基督教〉

中山道から分かれた北国街道は、開国後の横浜港から繋がる「絹の道」と呼ばれ、その沿線は国産生糸の重要な生産地となり、新しい文化が入り経済も発展していた。

この地域の基督教の中心は上田町で、明治十六年熊二が伝導で訪れた頃には、新たに教会堂が建築され、献堂式も行われていた。

援を受けない自給自足の為、常在の牧師がいない時期があり、停滞気味であったが同じプロテスタント(新教)のメソジスト(美以派)が浸透していた。

明治十九年五月十九日の信濃毎日新聞が『北佐久郡春日村の或る農家でこのほどから聖書学校という鑑札を掲げている、その教師は農家の生まれながらその業も取らず、昼夜聖書のみ勉強している』と伝えた。

春日村は中山道望月宿からさらに山手に位置しているが、天正年間に佐久郡を統一した芦田氏の本貫地であった。

その教師とは春日村堀端で名主を務めた豪農、岡部弥門の長男、岡部太郎である(18)。

岡部は明治十八年に同志社を卒業、在学中から春日村で日曜学校を開き、上田教会から小林格伝導師が往来、一時は石井弥左衛門が定住してた。その後上田教会を通じて派遣された神学生が二'三ヶ月ずつ伝導に訪れ、暑中は和知牧太明治学院卒の神学生)が勤めていた。この頃の岡部太郎の活動が判る資料が遺されている。

【J・Hバラ・巡回伝導】明治十九年七月二八日付『基督教新聞第157号

『去る三日バラ師上田来着、〈略〉五日夜会堂にて原沢紀堂(19)。小林格、バラの三氏演説せられたり同六日は北佐久郡春日村へバラ、小林に両氏出張せられ 男九人に洗礼を授けられり、同七日同郡小諸町にて説教あり〈略〉上田・春日村の集会には何れも二百余名にて共に珍しき盛会なりし』。二百名といえば春日村の人口の約半分に匹敵する数である。

明治二十年からは小野山嘉七郎(20)を中心に活動が進められ川井金左衛門(弥七郎)家の門に聖書学校の木札を掲げ、その後は望月講義所と茂田井講義所に分かれ明治二六年に移転するまで春日教会と呼ばれていた(21)。

岡部太郎と上田のバイブルウーマン小島弘子は、明治二一年共立女学校教師ピアソン女史を招き春日教会で説教会を開いた。

この時四〇〇名近く集まった聴衆の半数以上が女性達であった。

明治二三年には春日村の信徒を中心に廃娼運動の一環として、南北佐久の信徒が集まり「信濃基督教信徒婦人祈念会」が岩村田で開催された。これを契機に小諸、岩村田の信徒が合併、同年十一月に北佐久教会が岩村田に置かれた(22)。

岡部家と小島弘子の実家、坂城村沓掛家は代々の交誼があり、弘子の嫁ぎ先の上田町小島家(鍋大)と沓掛家は、上田教会初期からの信徒で、太郎の妻なおは弘子の次女で、岡部太郎は上田の小島家を拠点に牧師としての活動をしていた。

小島弘子は熊二が佐久に移住した事を知ると、当時まだ東京女子高等師範(現御茶ノ水女子大)在学中で小諸出身の佐野富寿を伴い訪れている(23)

士族の教会と呼ばれていた上田教会設立から10年余を過ぎ、人々がようやく基督教に耳を傾けるようになっていた。

廃娼運動と熊二

明治二五年一月一四日品川を単身で出発。途中の横川では峠が降雪の為、東京屋に止泊、ここは西群馬伝導の際の定宿で十五日の晩も数名の信徒が訪れた。十六日に軽井沢、小田井を経て岩村田の松葉屋に投宿。原沢紀堂と面会し、佐久の状況を聞き、住居を野沢の並木信一郎方に定めると、多くの信徒が訪ねて来た。

昼間は熊二自らが郡内各地の信徒、有力者のところを訪ね。夜は臼田講義所で説教会を開いている。

臼田講義所の在る南佐久の基督教はオランダ改革派一致教会の伝導が行われていたが、他教派の信者も多くいた。プロテスタント(新教)の集会で五人が集まると全てバラバラの教派という状態が続いていた。南佐久には熱心な信徒が多く、その中心が早川権弥(24)であった。早川は明治二二年五月に巡回伝導で訪れたJ・Hバラから洗礼を受けた信徒で、南佐久郡選出の長野県会議員を務め、基督教の観点から県下の公娼制度廃止を提唱していた。

早川家は前山村では八十三町歩の地券を持つ代々の大地主。父の重右衛門は「彭真社」の発起人に名を連ね、第十九銀行（後の八十二銀行）の頭取を務めていた。前山村の早川家と春日村の岡部家は同じ佐久郡内で縁戚関係で、権弥の弟寛治も東京牛込教会で受洗したことから早川家の兄弟姉妹も入信している。

この地方の代々の名主や地主の階層は血縁関係で結ばれていることが多く、熊二はこの伝手を頼りに伝導を行っていた。

彼らの情報の伝達は素早く、熊二が野沢に居を構えたことを聞きつけて、米国から帰国した直後の岡部太郎の弟、次郎が早速訪ねて来ている(25)。

早川が本格的に廃娼運動に取組んだのは明治十六年からで、隣県の群馬県議会が明治二二年までの遊郭廃止を決議したことによる。

この時の太政官令で完全廃娼に踏み切った県は和歌山、岐阜、鹿児島のみであった。

群馬県は二四年に公娼制度廃止を実現したがその原動力は基督教徒を中心にした全国廃娼同盟と手を組んだことである(26)。

長野県議会に対し早川は二二年、二三年と二回公娼施設廃止の議案を提出したがいずれも否決されている。

佐久地域がこの運動に盛り上がりを見せた要因には岩村田への遊郭移転の問題があった。

中山道宿場町として栄えていた追分宿は明治二一年に北国街道沿いの長野・軽井沢間に鉄道が開通すると大きく衰退していた。

佐久郡内で中山道が通っている岩村田には群役所、県の出先機関があり人口が集積していたことから、追分宿からの遊郭の移転が計画されたがこれには反対・賛成が取りざたされていた。

早川は長野県内の公娼全面廃止を盛り込んだ請願書を明治二四年十二月十四日付で浅田長野県知事に提出した。

熊二が佐久に移り、野沢並木正勝方へ引っ越した直後の明治二五年二月二九日に一つの事件が起きた(27)。

『二月廿九日(月)　整頓荷物〈略〉日向与茂治来訪、並木伯太郎津田仙之書状持参、村瀬志け之件を相談ス　日向氏志けを訪ふ、夜、井出早川來訪』

『三月一日（火）朝料理屋婦来談、村瀬志けの負債を償却し旅館へ　引き取る』

『三月三日（木）朝十時村瀬志け、並木直次郎同道野沢を出発す。岩村田松葉屋へ田的御代田にて立川雲平氏と会い会、相馬某に面会、夜横川東京屋へ宿ス』

『三月四日（金）朝横川を発し午後二時過品川へ着、津田仙、村瀬母に会遇し志け子を引渡ス、相馬氏と分袂、帰宅家内無恙』

事件のあらましは、村瀬志けという芸妓が拾弐円で東京から中込村の料理屋に売られてきた。その主人が志けに売淫を強要したが志けがこれを断ると迫害を受けた。志けは東京の養父村瀬盛信に手紙を出したが埒があかず、養父の村瀬が東京廃娼会に訴えていた。これを東京の廃娼会の津田仙が書簡にして、南佐久臼田で薬局を営む並木伯太郎の所に届けた。（並木家、通称丸寿の伯太郎は明治薬学専門校在学中に津田から基督教の指導を受け熱心な信徒であった）

並木は同じ青沼村の信徒、日向与茂治と書状を携えて熊二の所を訪れた。（日向は元竜岡藩剣道指南役で妻のトネは東京新栄教会で石原保太郎から受洗している）

その後早川をはじめ、数人の信徒と相談し六円七十銭の寄付を募りこの料理屋を訪ね、志けの負債を返却し身柄を引き取った。

翌日の列車で熊二が花と佐久で同居する為に上京することから志けと同道し、品川で津田仙と志けの母親に彼女を引き渡している《28》

この時出合ったのが立川雲平《29》で、日記に記されている相馬某は相馬愛蔵《30》のことで、二人との出会いが、これ以後の熊二の人生に大きく関わってくる。

公娼制度の廃止はその後も全国各地で提唱されているが、昭和三三年売春禁止法が施行されるまで実現されていない。

【注】

1 資料⑦P-149・152

2 上田龍雄（うえだたつお） 嘉永五年（1852）～明治四二年
祖父千風は歌人で、漢学を佐藤一斎から学び、佐久間象山と交誼があり、父善教と二代にわたる勤皇思想家、龍雄も京・江戸で学び維新後伊那県庁に出仕、山梨県判事に奉職後、殖産振興に尽力。

3 石原保太郎（いしはらやすたろう）安政五年～大正八年 備前岡山出身 牧師
明治七年横浜H・ルーミスから受洗、明治十三年一致教会の新栄橋教会牧師、

4 資料⑦ P-162

5 関友三・五太夫（せきごだゆう）明治四年～明治三八年 小諸荒町の生まれ、
関家は代々荒町の商家 初代五太夫は江戸の和算家、神谷蘭水に師事、代々関流を名乗り、関考和を輩出している。友三は五太夫家の直家系で、島崎春樹と共に明治学院で熊二から受洗、日本画家を目指し橋本雅邦に師事していたが病に倒れて断念。
荒町の実家は馬車鉄道会社を経営、友三は郵便局を運営していた

6 資料⑦P―169

7 同 p―172

9 『長野県史近世史・東信編⑵都市別行政区画変遷一覧 P38
『長野県政史』第一巻、P-244

10. 資料⑤P―277

11. 田野口藩（たのくち）大給松平家八代目乗謨（のりかた）は三河奥藩の分地であった田野領の陣屋支配から文久三年、竜岡藩一万五千石を立藩し、函館に続く西洋式城郭、五稜郭を築いた。
乗謨は維新後、大給恒（おぎゅうひさし）と改名日本赤十字、章局創設に携わり、 密院顧問を務める。

12. 彭真社（ほうしんしゃ）維新後「丸佐組」に佐久郡内の平田派門人が出資した為替方組織。
平田派国学の象徴である「榊」は佐久には育たないので「彭」の字を使用。
明治六年第二国立銀行設立後には渋沢栄一の周旋により、生糸仲間組合と繋がり、現在の八十二銀行開業に至っている

13. 小林豊次郎 文政八年生まれ、 中込村用掛、小林藤次郎の子。
弘化年間から下中込と跡部・桜井村の水争いは訴訟問題にまで発展。
豊次郎は村と江戸や横浜を往復した時に、村民の意識を新しい世界の知識を得る為の教育が必要と痛感し、学校建設を提案した、多額の費用にさして反対がなかったのは、彼の実現に向けた情熱と、いかに信望が厚かったかがわかる。

14. 市川代治郎 文政八年～明治八年 下中込村名主市川八郎右衛門次男。
大工棟梁で安政六年築地西本願寺を建築、維新後来日した米国人建築家ケルモルトに誘われて米国サクラメントの建設事務所で学び、明治六年帰国、村民の依頼で設計、建築を請け負う、完成後山梨県土木課員となり山梨県内の学校建築を手掛ける、其の後名古屋で石鹸工場、和歌山県有田でミカン栽培を手掛け七一歳で死去

15. 角田忠行 天保五年～大正七年 佐久郡長土近津神社宮司の次男、
岩村田藩脱藩後、江戸で藤田東湖、国学者平田鐵胤の門人となる、京都持統院「足利三代木像梟事件事件」の首謀者の一人、伊那谷の松尾多勢子を始め各地で潜伏、維新後は熱田神宮宮司となる。 島崎藤村著『夜明け前』の暮田成香のモデルといわれている。

16. 「赤報隊事件」慶応四年、新政府軍の東山道軍先鋒隊として 中山道を年貢半減などを旗印に進軍、信州入り後、相楽惣三以下の部隊は東征軍と齟齬が生じ、ニセ官軍とされ、相楽は諏訪で処刑、北信分遣隊は追分で捕らえられ処刑されている。

17. 「赤い陣羽織」 佐久落合村諏訪神社神官、水野保冨は平田派の国学者で長男水野保穂（功）は幕府講武所で西洋式調練を学び、赤松小三郎から西洋砲術を修め、御影陣屋で西洋調練や砲術指南も務めた、岩村田、小諸、田野口の各藩の指南役も務めていた。その出で立ちからの呼称である。

18. 岡部太郎 文久二年～昭和十九年 春日村岡部弥衛門の長男
同志社神学校卒業後、明治二六年から新潟京都群馬の教会牧師を務め、徳富蘇峰弟の蘆花と親交があった。安中教会で上毛教会月報を編集大正六年春日村に帰る迄各地で伝導活動を行う

19. 原沢紀堂 はらさわきどう 安政二年 上田藩家老原沢家三男
上田公教会設立時からの信徒、長野師範卒後上田朝陽小学校校長横浜共立学校教師、東京一致神学校で神学を学び、数寄屋橋教会牧師となり信越地方の伝導を行っている

20. 小野山嘉七郎 おのやまかしちろう 明治二年～昭和二六年 春日村地主小野山弥曽八家
春日教会の日曜学校時代から独学で教義を学び、明治二十年両国教会の三浦巡回牧師から受洗、村会議員、養蚕組合長を歴任。自筆の書『恩寵の記』には春日村から臼田講義所までの山道約二十キロを徒歩で通ったと書かれている。明治十六年二月十二日の熊二の日記

『午前十時前山出発、山道崎峻風雪僕面、午後二時春日村、竹花茂兵衛方へ着夜小野山嘉七郎かたへ訪問、同氏結婚式を行ふ婦人は伊藤金といふ』とあり、熊二が結婚式の司祭を務めている。 小野山との交誼は永く続き、晩年はミッションに掛け合い熊二の年金支給の支援活動を続けている

21 資料㉖『望月町史第一編(近代)第一章
望月の明治維新(4)キリスト教』P-90～99

23 資料⑧日本基督教団『日本基督教団長野教団史』

24 早川権弥(はやかわごんや) 文久元年(～大正十年 佐久前山村早川重右衛門の長男、衆院議員、長野県会議員 長野師範学校卒業後、明治十四年自由党入党、二一 年長野県会議員、三一年第五回衆議院議員選挙当選、その後も群会議員、前山村長などを歴任している

25 資料⑦P―174

26 「全国廃娼同盟会」明治十九年基督教徒婦人矯風会の矢島楫子に嶋田三郎・巌本善治・横井時雄・徳富猪一郎・植村正久 阿部磯雄が加わり結成されている。

27 資料⑦P―175

28 資料⑤P-289・297・321

29 立川雲平(たつかわうんぺい) 安政三年～昭和十一年 淡路国賀集村(現・あわじ市)
明治十六年明治法律学校卒後郷里で弁護士活動、十八年岩村田に移住、長野上田佐久で弁護士明治二五年衆議院議員当選、佐久自由民権運動の指導者として活動、島崎藤村の『破戒』に登場する市村代議士のモデル、熊二の終生の相談相手で有った

30 相馬愛藏(そうまあいぞう) 明治三年～昭和二九年 安曇野白金村相馬安兵衛の三男
明治二三年東京専門学校(現・早大)在学中牛込教会で受洗、田口卯吉・内村鑑三の教えを受け、札幌農学校で養蚕学を学ぶ、二四年から郷里穂高で廃娼運動に参加、井口喜源治と研成義塾の立ち上げを指導、明治三二 年星良(後の黒光)と結婚、上京後新宿中村屋を創業している。

《Ⅶ》【聖教者をめざして】

〈鉄道開通と基督教〉

当時東京から佐久へは信越線の御代田駅から小田井を経て岩村田までの馬車鉄道と人力車が利用されていた。 汽車と急な坂道を馬車に揺られる行程で、東京からは一日がかりか泊りがけであった。

野沢を拠点に、軽井沢、岩村田、望月、小諸から上田までの各地を伝導していた。熊二は、群馬の長野原牧場主の稲垣正直から馬を借入れ、郡内各地の巡回伝導を行い、「馬に乗るのは医者か宣教師」と言われていた。

明治二五年三月十日、熊二は花を伴って野沢にやってきた。これにより南佐久への定住が明確になり、野沢の城山館で礼拝と親睦会を開いている。臼田高等小学校内には信徒の原田秀人(医師)が幹事を務める臼田英学校が設立され、熊二が講師となっていた。

明治二五年八月十四日付信濃毎日新聞は「当地有志によって設立さる会員二十名、講師は木村熊二氏」(1)と報じた。 講義は英語よりも留学経験からの近代思想と、基督教の解説が中心であった。 その成果は井出雄太朗(医師)を中心にした教会設立の機運となり、明治三二年一月佐久教会発足に繋がった。

北佐久の岩村田には、基督教徒である菊地音之助(2) が二五年年四月に産婦人科病院を開業、菊地が中心になって岩村田文学院が二五年十月に設立されている。同年九月二八日付の信濃毎日新聞は、「岩村田文学院創立、岩村田にては基督教信仰の諸氏発起となり、此度文学院と云へる学校を創立、基督教関係の諸氏教員となり〈略〉和漢、英数学で、中学以上の業務に従事し又は高等の学問を専攻せんと欲する者の為に須要の教育を施す」と授業内容と目的を報じている。

嘱託講師は明治学院卒業生の若林杢太郎等で、熊二も開校直後から講師を務めた。最盛期は百名を超える生徒を抱えたとされている。

岩村田には文学院とは別に、明治二六年一月に講義所が開設された(3)

南佐久の野沢には、基督教の関係者ではないが、文人として交流していた人物に、並木梅源がいた。 並木家は代々岩村田藩の会計を司り、南佐久第一の旧家で、長男の和一は貴族院議員を務め、一族は二十余戸の支族と分家を出している。

梅源は雅号で名は衛七、天保三年生まれ、熊二より三歳年上、在郷の文人として知られ、熊二とは漢詩の交流を通して意気が通じ合い親しくしていた。木村家の史料の中に、梅源から寄せられた漢詩が残されている。

〈小諸講義所の開設を目指す〉

南佐久で最初に知遇を得た早川権弥とは廃娼運動を通じ、基督教徒同志以上の交流で、心強いものがあった。

明治二五年三月中込の酌婦を苦境からの救出する際の代言人（弁護士）立川雲平と出会う契機は、早川家の土地に係わる訴訟問題を担当していたことからであった。

立川は郡役所の有る岩村田に事務所を構え、佐久、上田、長野と広範囲に行動、地域の事情に精通していた。お互いにこの地方で「きたれっぽ」と呼ばれる、他所から来た者同士で、基督教徒でもあり意気投合していた。

此のころは若い信徒達との交流も盛んで、岩村田講義所設立に尽力した菊地音之助の妻歌子は、立川の妹で、熊二が仲人を務めた(4)。

明治二五年八月十五日には夏休みを利用して、甥の田口文太が東京から訪れ、野澤の信徒と一緒に群馬の信徒と軽井沢で合流。総勢五十四名で浅間山に登り、暁四時に山頂に到着し、御来光を拝んでいる(5)。

南佐久での熊二の伝導活動が一応の結果を収めていたのに対し、北佐久は南佐久より先に、伝導が行われていたにも関わらず、信徒の不振はどうすることも出来なかった。

帰国直後の十六年の夏に小諸を訪れた時は、真木重遠の士族屋敷が講義所的な役目を果たしていたが、真木が上京すると中心となる信徒がいなくなり、小諸には拠点が無くなっていた。

小諸講義所の開設は既に関友三と佐野義質（Ⅳ注12参照）に依頼していたが進展していなかった。

明治二五年二月には早川家の縁戚である。北佐久郡御影村の柏木新三郎(6)の所を訪れ、小諸講義所設置の計画を打ち明け協力を求めた。

柏木新三郎は基督教徒ではなかったが、旧幕府領御影新田の開発人柏木小右衛門から数えて九代目の当主、人望の厚い人物としても知られ、御代田の素封家原田耕三郎と共に北佐久の実力者であり熊二の協力者であった。

後年盟友立川雲平が国会議員に出馬する際に、原田は全面的な支援をしている。

本書の最も貴重な資料である『小諸義塾と木村熊二先生』の著者小山周次は、柏木新三郎の甥にあたり、この叔父の薦めで義塾に入学している。

（小諸市御影新田の陣屋には柏木家に関する史料と、熊二が新三郎に送った漢詩・書簡と義塾卒業後、水彩画家となった小山周次の作品が遺されている）

明治二六年四月一日に信越線は直江津・東京間が全通。碓氷峠にアプト式が導入され、東京からの所用時間が大きく短縮された。

小諸が佐久地方の交通の要衝となり、商業の街として大きく発展することが見込まれ小諸講義所の開設が急務であった。

『朝野沢並木直氏方を発し華美（はなび）（馬の名前）ニ鞭ち岩村田へ至り菊地氏を訪　御代田ニ至り原田耕三郎氏を訪　御代田駐車場（駅）まで歩行汽車ニ而小諸を訪　小諸ニ至り佐野義質氏を訪ひ兼て約束せし家屋之件を議ス　耳取之家屋を訪ひ諸品を一覧す　田沼波太郎氏を訪伝道上之件を相談ス　再佐野へ立寄り直ニ駐車場へ到る。御代田に時枝虎雄ニ面会同氏原田氏より華美を引寄置佐然ハ直ニ華美に乗し出発雨甚人馬共ニ湿ふ華美順良途を急き夜ニ入り暗路なるも無恙（つつがなく）帰野沢へることを得るハ彼の功なり丸寿ニ至り入浴して一泊す』。　これは明治二六年五月二三日の日記の記載である。

熊二の乗馬は米国仕込みで、自信もあったが現代に置き換えてもかなりの強行日程である。「耳取之家屋」とは耳取町（現在の古城区）の士族屋敷と思われるが正確な場所は不明である。

小諸講義所開設が正規に開設されたのは、明治二七年二月二四日の日記には、『朝柏木來訪　今夕小諸講義所開設之式を挙く来会者三十一名〈略〉』とあることから、小諸義塾の創設より後のことになる(7)。

〈信仰と開墾〉

『人生の行路ハ濁道ニ比してみれハ其難路之さまこそ知られけるおのれ野沢辺ニ住み侘て一トせと五つの月を送り村々の人〻と交際し何れへ参りても神の恵みの厚か為艱難の中にも人々の歓心を得ていと安らけく日々を迎へたりけるたゝ病ひといふものゝ為種々の障害ありてこたひ山の辺なるこの村へ移ることとなりたれと早川権弥氏の厚き交際と一二の村人に知己ありまた神の御手ニ身を龍し家族を携へてここに来りぬ』

明治二六年五月一二日『前山村日誌』と題した日記の冒頭に記されている。

基督教指導者として帰国して既に十年が過ぎ四八歳となっていた。

時代の流れは新たな方向に向き始め、基督教に対しても大きな変化が訪れていた。

それが顕著に表れたのが明治二四年一月に起きた内村鑑三の教育勅語に対する「不敬事件」である(8)。

これに対しては井上哲次郎、東京帝国大教授が新聞各紙で『宗教と教育に就いて』と題して、基督教を鋭く攻撃していた

基督教に理解を示していた兄の勉は兵庫選挙区(出石)から衆議院議員に当選し政界に転身していた。

義弟の田口卯吉も府会議員から衆議院議員に当選、明治女学校発起人の嶋田三郎らと帝国財政革新会を結成。基督教とは一線を画した行動をとっていた

熊二は中央の都市部のインテリ(知識階層)や富裕層への布教に限界を感じ、信州佐久への移住を決意している。

彼の大きな目的は信仰と開墾の生活であり。心の中で常に思い出すのは、若き頃の米国ハーランドの風景と開墾と祈りに徹し、強靭な精神を持った人々の姿であった。

明治二六年五月には前山村に転居し「馬に乗るのは医者と宣教師」と言われ、郡内の山村を訪れた時に見た養蚕に興味を示し、自宅で蚕の世話を始めたのも此の頃からであった。

前山村から奥の大沢村付近、「一杯水」の開墾を計画、再三早川達と協議行い現地を度々訪れ、唐松の植樹を手始めに水源開発にも着手していた。

是より少し後になるが、小諸講義所が仮設された頃「柏木新三郎と林檎の苗木」の話がある。

熊二は佐久に移住してからも東京と佐久を行き来していた。 東京からの帰途、御影新田にある柏木家を訪れた際に、浅間山麓への果樹の植樹を相談した経緯から、林檎の苗木五百本を入手して、新橋駅から鉄道便で柏木新三郎宛に送付した。

しかし当日、新三郎が不在であった為事情を知らない妻が送り返してしまった(9)。

これについて「もしこの林檎の苗木が御影に植樹されていれば浅間山麓が違った風景になっていたかもしれない」と新三郎の孫にあたる柏木家十一代当主の柏木易之氏が語っている(10)。

結局この苗木は小諸の山林地主、小山家の所有する松井地籍に植えられ現在もリンゴ農園となっている。

熊二の信仰と開墾への意欲は終生変わっていなかった。 講義所を開設するのと同時期に小諸義塾を開いているが、教育だけに情熱を傾けた訳ではなく、森山の桃栽培、千曲川河畔の中棚鉱泉の開発などにも力を注いでいた。

しかし住居を小諸に移したことから、南佐久での活動が不十分になり、最終的にはミッションから解雇される結果なり、一杯水の開発もその後はどの様になったのかよく判っていない。

この熊二の行動が、物事を完遂出来ない、飽きっぽい性格と批判されているが、当時の基督教を取り巻く情勢を考えると、それだけではないと思われる。

〈森山の桃栽培〉

北佐久郡森山村の塩川伊一郎が熊二の所を初めて訪れたのは、明治二八年九月二十日で『牧野老人塩川栄一郎来訪』『二一日朝 森山塩川栄一郎を訪ふ午後十二時半帰宅』(11)。 ここには栄一郎と記されているが、熊二が「イ」と「エ」がはっきりしない佐久の方言を聞き間違えていたと思われ、以後の記載は伊一郎となっている(12)。

塩川伊一郎は、熊二が宣教師と同時にマスターオブアーツ(修士学位)であると、柏木新三郎から教えられて訪れた。 翌日は熊二が伊一郎の所を訪れ、詳しい話を聞いた。

会話の内容は宗教の話ではなく、伊一郎の果樹栽培への熱い意気込みであった。

塩川伊一郎は、柏木村の生れで森山村の塩川家へ婿入りし、明治二二年から小県郡丸子の三才山峠の麓で、林檎栽培を息子勝太(二代目伊一郎)と始めたが二七年に一度失敗している。

明治二九年三月三日に森山村で熊二は演説会を開き、桃の栽培を奨励した。熊二は日記の記載に信仰の話は「説教」。それ以外の講話は「演説ヲナス」と記して、聴衆に対して話の内容を分けていた。

この演説会の聴衆は三十名を超え、その中の八人が賛同。伊一郎と熊二も出資して桃夭舎（とうようしゃ）を設立して桃の栽培に本格的に取り組んでいる。

伊一郎は桃以外にもイチゴ栽培を手掛け　イチゴジャムの缶詰製造と販売に成功。明治四三年には天皇皇后両陛下幷皇太子殿下に献納している。

明治三九年三月七日の伊一郎の死去を、『塩川伊一郎氏之凶報に接す万感如湧伊一郎君八余と同盟して森山村へ桃を栽培セし人なり今日之盛況を看るを得たるハ同君之畢世の力とも云ふべし今や余八君と幽明境を異にする可歎なり』と記し、その死を悼んでいる(13)。

この時の熊二は義塾の存続問題で窮地に追い込まれ、将に歎きの言葉であった。其の後二代目伊一郎の勝太が事業を継承、その子息の昇が三代目伊一郎を襲名している。

「塩川缶詰合名会社」は、昭和十四年まで存続、小諸の主要産業となり、今も森山地区には春になると美しい桃の花が咲き乱れている。

〈中棚鉱泉開発と水明楼〉

小諸城址懐古園の眼下、千曲川河畔に熊二が書斎として建てた水明楼が現在も残されている。

七五三掛と呼ばれたこの付近に鉱泉の水脈がある事は以前から知れていたらしいが、本格的に掘削したのが熊二である。

小諸に住いを移した頃の日記には持病のリウマチと野沢時代に落馬した怪我が癒えず、『養蓮寺之鉱泉ニ浴ス』と所々に記されている。

この鉱泉は、現在の市町十王堂脇に昭和五十年代まで営業していた天王鉱泉と思われ、熊二が住んでいた士族屋敷からは少し離れているが頻繁に訪れていた。

水明楼に遺されていた史料に「鉱泉浴場建設趣旨」と題した文書がある、

『筑摩河畔の如き鉱泉併出する地多し、この天然の美影と鉱泉を利用して一つの浴場を設け、衆人共楽の場所を開かんとす』と記されている。

中棚鉱泉と呼ばれたこの場所は、当時の北佐久郡々長で旧小諸藩士族鳥居義処の所有地であったが熊二はこの土地の一部を買い取り明治三一年に浴場を開設。住宅兼書斎を建築、水明楼と名付け、後に長野教会に移っても自宅としていた。大正六年に東京に住所を移しても夏期は帰園と称して毎年訪れ、死去する二年前まで訪れていた。

水明楼の書庫に木村家の資料が昭和三四年まで遺されていたのは奇跡ともいえる。もし全ての資料を東京に移していれば、関東大震災、戦時下の東京空襲での焼失は免れず、熊二の足跡もその殆どが消えていたことになる。

明治女学校の研究を進めていた東京女子大学、青山なお教授は、水明楼の資料が遺族から寄贈された際「まるで宝の山に入ったようだ」と著書で語っている。

本書は、水明楼に遺されていた史料を基に研究を進めているが、冒頭に記したように熊二が記した日記には所々に欠落した部分が見られ、敢えて記さなかったのか、故意に抜き取ったのかは解らない。

特に明治三十年二月から三二年十二月三一日までは遺されていないのは残念であり、熊二の人生で最も重要な期間で彼の心の内を知りたい時期でもある。

当時の熊二様子や小諸議塾に就いて著した書籍は、議塾開設に尽力した小山太郎の遺した『小山太郎日記』。明治学院の教え子で荒町関家に遺されていた『関友三日記』。熊二を最初に佐久を紹介したとされる上田龍雄の『上田龍雄日記』等を資料としているが、これ等はあくまで個人が書残した史料でそこから熊二の内面を知ることは出来ない。

小諸義塾に島崎藤村が赴任したのは明治三二年四月されているが、熊二の日記には記されていない。

藤村は明治三八年四月二九日に一家を挙げて小諸を去っている。島崎藤村の小説『破戒』は明治三九年に自費出版している小諸での藤村は作家を志し、習作として義塾の様子や、熊二をモデルにした小説を著している。

義塾と小諸を題材にした『千曲川のスケッチ』の書き出しは明治三三年からの出来事で、この本が出版されたのは大正元年である。

藤村はその他にも小諸や周囲の人たちを題材にした　数編の小説を著しているが、それは作家である島崎藤村の目を通した「小説の世界」であって、そこから熊二の本当の姿を追うことは無理があると思われる。

本書では熊二とその家族、遺族の尊厳を守る為に、時系列が前後することもあるが、これ以後の考察は、あくまでも熊二が残した史料を基に進めたい。

【注】

1 資料⑤P-305

2 菊地音之助　きくちおとのすけ　慶応元年生まれ

菊地寛平の長男、横須賀海軍鎮守府除隊後、植村正久から受洗明治二五年に岩村田で産婦人科医院を開業、明治三十年軽井沢病院を開く、妻歌子は立川雲平の妹、熊二が仲人を務め。北佐久で最も信頼していた信徒。明治三九年満州大連に渡り医院を開業している

＊菊地寛平　きくちかんぺい　弘化四年～大正三年

佐久郡北相木村出身　旧姓小池　佐久郡岩村田で代言人

（弁護士）を務める。明治十七年自由党参加、秩父困民党蜂起で参謀長その後逮捕され、明治十九年から投獄されていたが三八年恩赦で釈放され余生を佐久で過ごしている。、

3 資料⑧P-196

4 資料⑳P-171

5 資料⑦P-182

6 柏木新三郎（かしわぎしんざぶろう　文久三年～昭和十四年　佐久郡御影新田陣屋の生れ

承応年間の御影新田用水の開発人柏木小右衛門から数えて九代目当主、維新後幕府領陣屋は廃止、医学所を開設し天然痘撲滅（種痘）に尽力、基督教徒ではないが熊二の伝導活動の理解者であった。

7 資料⑦P-195・197・210

8 同　P-196

＊「内村鑑三の不敬事件」　明治二十四年一月九日第一高等中学講堂で教育勅語奉読式の際、天皇の御名に対し、内村鑑三が最敬礼をしなかったと同僚、生徒から非難を浴び、新聞等に取り上げられ社会問題視され、内村は教職を依願退職している。

9 資料⑦P-230

10. 資料㉑P—63

柏木易之『御影用水・新田・陣屋』「木村熊二と柏木新三郎」櫟出版　平成二一年

11. 資料⑦P-240

12. 資料⑰P-32小林收『塩川伊一郎評伝』龍鳳書房平成八年

13. 資料⑦P-325

〈Ⅷ〉　【小諸義塾の創立】

〈小山太郎との出会い〉

木村熊二が小諸に開いた「小諸義塾」は多くの書籍に小諸の小山太郎(1)を中心とした若者たちの要請により創立されたと伝えられている。

熊二の日記に小山太郎の名前が最初に記されているのは、明治二六年六月十五日　野沢の並木伯太郎の処で出会ったとある。

並木家が小諸与良町の小山家とは縁戚関係であったことから小山太郎が野沢の並木家を訪れた時、初めて会っと思われる(2)。

会話の内容を日記だけから読み取ることはできないが、次に二人が会ったのは、十月十八日で、『小山太郎氏を訪懐古園を趙遙ス　佐野氏来訪』とある。

十一月二日に小山からの書状が届き、明治二六年十一月七日の記載を見ると

『朝前山村出発小諸へ歩行佐藤小山氏訪問　上田へ出発〈略〉午後五時頃田中ニ而機関車之不都合にて一時間余滞在　午後七時過小諸へ着　佐野氏へ立寄高岳院（光岳寺）ニ而義塾有志者へ面会』(3)。

義塾の開設について話し合っているが、この日の午前中は上田で牧師会を開催、その帰途に小諸に立ち寄っての会合であった。

野沢で小山太郎と面会する以前、小諸講義所の開設を計画していた熊二は、既に小諸に家屋を借りる手はずを整えていた（前章Ⅶ〈小諸講義所の開設を目指す〉参照）。日記の所々に『耳取の寓』と記されているがこの屋敷は伝導の範囲が上田・長野方面にも広がり、小諸を利用する機会が多くなり借りていた。　四月十七日の小諸講義所の開設に向け、佐野義質の周旋で月額三円で借用した佐藤知敬宅と思われる(4)

〈小諸義塾開設〉

明治二六年十一月二十日には熊二が前山村から小諸に出向いて具体的な話し合いを始めた。　この時に集まった八名が設立委員で小山太郎、小林市之助、青木金蔵、飯田万治、室賀鑑蔵、山田環、西岡悟太郎、世吉森三郎の各氏でいずれも小諸の若者達である(5)。

『朝小諸へ出発小原学校飯田万次郎を訪小諸へ出青木其他の人々訪耳取之宅へ休息小山太郎飯田来りて義塾の件ヲ議ス　夜諸子来訪塾規を編成ス此夕一泊』。

翌日は前山村に帰り、休む間もなく二二日には碓田（臼田）へ出張し講義所に泊り。二三日は望月で開催された佐久郡信徒親睦会で演説。

二四日は茂田井の信徒、武重一裕氏方を訪問、夜は演説会開き一泊している。

明治二六年十一月二五日の午後、小諸義塾の開校式が行われた。

『小諸義塾開校式を耳取町佐藤知敬氏方に於て午後一時挙行挙行。有力者、資産家、町会議員、役場吏員等四十名出席。創立委員は講師兼塾生、即ち木村先生指導の下に自学自習也』熊二は此の前夜、茂田井に宿泊していた。

『午前武重氏を発し山路を取り小諸へ出ズ　佐藤邸へ着　此日小諸義塾開業ニ付小山太郎飯田万次郎両氏非常ニ尽力周旋す当夜来会者甚多し　柳沢呈三氏之宅を借り義塾とす　佐藤邸に一泊』(6)

義塾の授業は明治二六年十二月一日から始められた。

「私立小諸義塾沿革史」は小山太郎の日記を主にして著されている為、熊二の記載と異なる部分もあるが義塾の内容については詳しく記されている

最初の塾生は委員を含めて二十名。設立委員の中には既に教職に就いている者もいた。

熊二を塾頭としているが、お互いが教え合うという学習塾の形態で修業年限に規定はなく、会費と授業料で運営している。

初期の塾生には後に東宮御用掛となった、田中富生、県内各地の校長を務めた小林好郎、俳壇に名を遺した臼田亜浪（卯一郎）、等がいた。(7)

〈家塾時代の小諸義塾〉

明治二十七年二月には教室が手狭になり、太田道一所有の大手門（瓦門）を借用して教場と図書館を併設した。

委員の拠出金で学習資料の書籍を購入し一般会員へも貸し出し、熊二の蔵書に加えて、義弟田口卯吉の経済雑社等の書籍も随時加え充実させた。　一般会員だけでも百三十名を超えたと『小諸郷友会報』は報じている(8)

明治二七年八月一日日本は清国に宣戦布告、国中各地で愛国心が叫ばれていた。九月十八日に義塾講堂でG・Hフルベッキを招き「愛国心について」と題して時局講演会を開催。　内村鑑三の不敬事件以来、基督教に対する国民の目は厳しものがあったが　会場には百名近くが集まり、当時の小諸町としては空前の催しで、翌十九日の夜は、小諸講義所で再びフルベッキの説教会を開いている。

馬場裏の小林右三郎宅を借り前山村から家族を呼び寄せ自宅兼講義所としていた。『小諸町九百五拾参番地へ寄届を差し出ス』(9)。

前山村に転居してから僅半年で小諸に転居したことから、次第に日曜日にも臼田教会へは行かなくなり、東京中央伝導委員会から、日本基督教会牧師の資格を解任された為に、熊二の収入源はオランダ改革派伝導機構宣教師の謝儀だけになった。

此の頃の心情を基督教新聞に「在信１０年の目的を語る」と題して、掲載している。

『上野ステーションより上車帰途に就く　柳桜をこきませてと誇りたる都の花より野辺の菜の花に蝶の舞われも花とて咲揃ふ山桜ニ鶯の歌なと遥かにけふあるを覚へたり』と書いている。

青年から壮年期を過ごした、米国ミシガン州ハーランドはニューヨークやボストンなどの都会ではなく、草深い田舎で開拓魂に満ちていた。　神学校のあったニューブランズウィックも静かな田舎町であった。

東京より寧ろ、田舎の方に心引かれるものがあり、腰を据えて小諸に住む決意をしたと思われる(10)。

森山の桃栽培に関しては前章で記したが、その他も御牧ケ原で苺の栽培を手がけ、城下の御堂前（駒形神社前）にラミー草（苧麻科）の栽培を始めたのもこの思いからである(11)。

義塾の評判を聞いて、旧藩主牧野康済（やすきよ）公の子息で東京在住の牧野康強（やすたけ）が鳥居義処（よしずみ）氏を通じて入塾を申し込んできた。　西岡信義（のぶよし）町長の周旋もあり、馬場裏から耳取町の佐藤知時の宅に移った熊二の所に寄宿することになった。　明治二十八年二月の日記には

『本籍　南佐久郡前山村百六拾八番地之内弐番
北佐久郡小諸町九九九番地　寄留』(12)と記されている。

〈蔵原からの手紙〉

「国を思ふ身は浮草にあらねとも　水にまかする老の行く末」
「枯はてゝ人目も草もなかりけり　淋しさまさる冬の山里」(13)
明治二四年十二月佐久に移住を決意した頃の句である。翌二五年一月に野沢を訪れて以来、佐久の伝導活動に奔走していた。

幾度となく東京へ行き伝導局（ミッション）や教会関係者だけでなく実兄桜井勉、義弟田口卯吉の親族の所を訪れていたことが日記に記されているが、常に熊二の悩みであった、長男の祐吉についての記載は皆無　である。
祐吉は明治二四年四月に詐欺罪で収監され、保釈後の六月に熊二の命令で入院治療し退院後は行方をくらまし、音信不　通状態であった。
明治二五年三月一日、佐久移住の手続きで東京に戻り、恩師である勝海舟の所を訪れた時、祐吉の行動を知らされた。
『二五年一月二四日木村熊二倅10円遣わす』
『三月七日木村熊二倅、所々へ借金致す旨申し聞く過日遣わし候も偽りの由なり』と『勝海舟全集・海舟日記』に記されている。（勝部真長編勁草書房1973年刊）
祐吉は、勝の所以外にも熊二の知人を訪れ、詐欺紛いの行為を繰り返していた。
京都の同志社に在学していた祐吉は友人、知人の他に・熊二の関西方面の知人を訪ねいた。その一人に蔵原惟郭（これひと）がいた(14)。
蔵原は英国への留学後、故郷の熊本に戻り熊本英学校の校長に就任。新島襄亡き後の熊本バンドの中心人物でYMCA活動では、熊二の協力者でこの頃の熊二の境遇を知り九州での助力を求めて来ていた。
明治二六年三月一日に東京で蔵原と面会したが既に基督教関係者の間では熊二が熊本に行くという噂が広まり、熊二もこれを否定していなかった。
其の後蔵原から熊二の所に葉書や旅費までも送られてきていることから蔵原との会話の中に祐吉の問題があったことは充分想像できる。
心の中では祐吉と九州でやり直す気持ちもあったが、えってその事が不安となり熊二の決断を鈍らせていた。

熊二が熊本へは行かない事を表明したのは、明治二六年十月五日に東京の伝導局を訪れた時で、将に小諸議塾創立を決意する直前であった(15)。
音信不通であった祐吉の行動が熊二の日記に『明治二七年三月十一日〈前略〉熊本裁判所より木村祐吉当之書状到達本人踪跡不明分なるを以て書状を送り返ス〈略〉』と記されている。詳しい事情が判明したのは半年後の、長崎の教会に就任していた盟友、大儀見元一郎からの手紙であった。
明治二十七年九月十一日『長崎大儀見氏より通信祐吉之件を報ス　同氏へ返書金参円相廻〈略〉』(16)。
祐吉は「私書私印偽造罪」で裁判に附され、熊本刑務所で服役。熊本の蔵原からは見元引受人を断られ、出獄後、長崎の大儀見の所を頼ったと思われる。
熊本で逮捕される以前、山口県でも事件を起こしていたことが判る祐吉の手記が東京経済雑誌社宛に出した書簡に遺されてい(17)。

〈家事には不向きだった熊二〉

長男の祐吉が父親の熊二の前に現れたのは明治二八年七月十日で、三年ぶりで、小諸を訪れての再会であった。
『祐吉巌本之書状ヲ以て來宿す有事情暫時其罪を責問せず投宿を許可ス』
『小土肥氏之閑室ヲ借り当分祐吉を居らしむ』と記され滞在している。
この時、親子の様子を心配した大儀見氏は八月二三日、東京から長崎への帰途に立ち寄り、小諸駅で面会している。
その後祐吉の怪我は、手術を受ければ治ると医師の佐野義質等からの助言を受け、十月六日に祐吉は上京した。
祐吉が東京でどの様な生活をしていたのかは不明で、熊二は十一月には生活費を送っているが、十二月に再び金を要求する始末であった
『十二日（木）晴、〈略〉祐吉書状ヲ以金円ヲねダリ来彼ノ愚可嘆』熊二の落胆は大きかった(18)。
明治二九年五月十二日の日記には『執達吏来りて祐吉告知状を持参ス請取之本人見当たり次第之を渡ス　相訳ス』。
五月二九日『岩村田執達吏来りて祐吉之宣告書を持参ス』とあり、実兄の桜井勉からの便りで知らされた(19)

祐吉がどの様な罪に問われたのか、其の後の状況に関しては、熊二の日記が明治三十年二月一日から三二年十二月三一日迄欠落している為に知ることができない。

小諸議塾記念館の資料には、明治三二年五月巣鴨収監中に病死(三二歳)、『悪い子ほど可愛い』と述懐した心境が記してある。

慶応四年に生まれ、三歳から十五歳まで父親の顔は一枚の写真で知るだけで、母親に育てられて来た祐吉が、父の熊二に対してどのような感情を抱いていたのかを知る術はない。父親の熊二が父母の愛情を受けずに育ち、束の間の家族生活後に米国〈留学。帰国後も祐吉に父親としての愛情を注ぐ事が出来ない環境であったことがお互いを不幸にしていた。

母親の鐙子は父親のいない家庭で育てた祐吉の行く末を案じ、留学中の熊二に帰国を歎願していたことが、往復書簡集に遺されている。

鐙子が帰国後の熊二の祐吉に対する態度に戸惑と不満があったことも覗われ、義弟の田口卯吉や熊二の実兄桜井勉に、熊二と祐吉に関する悩みを打ち明けていた。鐙子は死を覚悟した時に夫の後輩、巌本善治にも祐吉の行末を託している。父親の熊二が巌本にとっては偉大であるだけに、祐吉に対して遠慮があった。その為熊二に真実を伝えることが出来ず、鐙子の意には答えられなかった。

熊二は幼少期に相次ぐ肉親と離別、米国留学で神に仕える道を選び、帰国後、新たな道が開けかに見えたが妻燈子が急死。其の後は祐吉がモルヒネ中毒で奇行を繰り返すなど、熊二の家庭に恵まれない境遇に対して、周囲はある程度の理解を示していた。しかし神に奉仕する身であるはずの熊二が自らの家庭を崩すという、神に背く行為に及んでしまったことも事実である。

〈木村熊二の女性観〉

熊二の演説の態度は将に米国仕込みの知識と英語を取り入れ、他の日本人指導者にない独自性があった。特に女性に対しては教義を解くだけの説教という堅苦しさがなかった。この態度は新島襄と相通ずるところがあり、新島が妻八重に接した姿

熊二も新島も米国生活で女性に対する西洋式の接し方を経験し、日本男子の持つ優しさを、基督教の教義で包んで女性達に伝えるように努めていた。

新島の意を理解していた熊本バンド(仲間)の指導者の殆どが、日本の女子教育に携わっている事からも理解できる。

熊二の説教から、基督教の女性に対する包容力を最初に理解したのが妻鐙子で、彼女を中心とした下谷教会の女性信徒の集まりが明治女学校創立の原動力となっていた。

群馬県での伝導活動が成功した要因は女性解放の廃娼運動と手を結んだことであり、佐久に移住を決意したのも長野県下の廃娼運動の先覚者早川権弥の知遇を得たことからである。

日記の所々に、信徒はもとより、たとえ少人数の集まりであっても、『一場の演説ヲ為ス』と記されその弁舌ぶりが覗われる。

鐙子が死去した約半年後、明治二十年四月二九日に十九歳の伊藤花と再婚しているが、花とは親子ほどの年齢差があり、当時としてはさして珍しい事ではなかったが結果的に花とは離別している。

明治二八年十二月十二日、。義塾の前期日程が終了、年末年始の休業に入る予定で自宅には多くの人々が訪れ忙しい時期を迎えていたが、花は一ヶ月ほど前から体調を崩し実家の伊藤家に帰っていた。

『十三日(金)晴、土蔵ヲ掃除シ花の家事ヲ処スルノ乱雑不規律ニ驚ク斯ル愚婦ヘ一家事ヲ任せ置キタルハ我カ罪ト過失ナル丁ヲ悔ユ』⑳

花は明治女学校の生徒であったが、熊二との結婚に至るまでが判る資料は殆ど遺されていない(V章〈繰り返さ れる教派の争い〉注13・14参照)同様に離婚に関する資料も残されてはいない。二四歳という年齢差の夫婦関係を日記の記載だけで読み取れるものではなく、これは明らかに人為的に抹消されたと推測できる。

熊二は伊藤花との再婚した頃は体調を崩すことが多く、特に夏の暑さには弱かった。熊二の体調を心配した頌栄学校の経営者、岡見家の世話で、房州木更津矢那村の別荘、まだ開発されていない品川の田園地帯にあった岡見家の寮などで療養した。その際には必ず花が付き添っていた。

花自身も決して健康とは言なかった、佐久に移住してから度々体調を崩し、一時は実家の伊藤家に帰っていたことが日記の所々に記されている。

彼女が若い故の奔放な所もみられたが二人の仲は決して悪くなかったと思われる。結婚式の司祭が安中教会の海老名弾正であった縁から、新婚旅行を兼ねて上州の妙義山と磯部温泉を訪れている。明治二四年十月小諸〈の旅行の帰途には、二人の思い出の地として立ち寄っている。

佐久に移住後、小諸義塾を開くなど忙しい熊二の行動に追いついていけない花の姿を、日記の一部に垣間見ることもできる。

都会育ちの花が前山村では養蚕の手伝いをするなど、周囲の人々との人間関係も決して悪いものではなかった。

島崎藤村が「旧主人」と題した小説を発表し、其の中で花がモデルではないかとされる女性の姿が描かれたことで、間違った花の姿となって伝えられている。小説は発表後、信濃毎日新聞主筆、山路愛山《21 の指摘により発禁本とされている。

〈三度目の結婚〉

明治二九年九月一日、熊二五二歳の時、二三歳の東儀隆子を、三人目の妻として迎えているが、前妻の伊藤花との出会いと同様に、東儀隆子との出会いと結婚に至るまでを記した詳細な資料は遺されていない。

東儀隆子という名前が初めて日記に記載されたのは、明治二九年一月一日のことである。『〈略〉山村ノ新年又愛ス可シ旅情弧寂　午後い近傍二歩ヲ試ミ田中参子ニ出会宿ヲ柏屋ニ転ス東儀隆子亦在り　二子ト雪ヲ踏ンテ松林ヲ経過シ安楽禅寺ノ丘二登ル〈略〉』《22

前年の十二月に花との離婚を決意、実家の伊藤家を通じて本人へ言い渡し、法的手續が終わらずに新年を迎えた。

明治二九年の正月は一人で別所温泉の旅館で過ごし、そこで出会ったのが上田の信徒達で、その中の一人に東儀隆子がいた。

正月を別所温泉で過ごした熊二と隆子が交際を始めた経緯と、その後に関しては大川公一氏が『青春小諸義塾サムライ教師と未来の学校』と題した著書で発表している《23

小諸義塾開設後にミッションから臼田教会牧師の任を解かれた熊二は、小諸を拠点にして上田・長野を伝導活動で訪れていた。北信地域は美以派（メソジスト）が中心で、講演会の聴衆の多くが女性信徒であった。熊二と東儀隆子が知り合ったのも上田の信徒との交流からで、結婚式もごく簡素であったと思われる。

『九月一日（火）マク子―ル氏来りて結婚式を司る上田幷南佐久より友人来訪
遠藤鉄太郎関屋長枝諸事周旋〈式を講義処〈行ひ懐古園内松月楼ニ会ス立川
雲平大谷虞＊氏演説あり」《24

当時、明治人士と呼ばれる上流人達は妻帯しているのが当たり前で、本妻を亡くすと後妻を迎えるのが普通であった。厳格なカソリックの聖職者（神父）とは違い、プロテスタントの指導者の多くはは日本社会に倣い結婚している。この結婚も慶事として小諸郷友会報にも報じられた。

フェリス女学校卒後、外国人宣教師の助手（通訳）として、上田教会を訪れていた東儀隆子は、基督教指導者の熊二に優しさと、教育者としても魅力を感じていた。本来教職を志していた彼女は、結婚後小諸小学校で教鞭を執り、夫の熊二と共に女子教育指導者を目指し、熊二の人生を支えている。

明治の新しい時代の教育を受けた彼女の行動は、封建的な小諸の風土にはなじまなかったもといえるが、結婚から十年後の明治三九年三月には小諸義塾が閉校し、収入が途絶えた一家の家計を支える為に、単身で上京。家庭教師教として働きながら献身的に尽し、熊二との間に生れた三人の男子と四人の娘（一人は夭折）を育てている。

【註】

1　小山太郎（こやまたろう）　明治四年（1871）～昭和三三年　小諸与良町庄屋小山家の生まれ、野澤の並木家「丸寿」の伯太郎とは従弟関係。小諸の若者達の中心的人物で義塾創立・運営に携わる。多くの書籍が熊二の遺した資料の欠損分部を補う際に彼の記した「日記」を資料としているが、飽く迄も個人の記録である為、記載の一部に日付けの間違い記憶違い等を、後に訂正したと思われる個所も見られる。

2　資料⑦　P-198
3　同　P―204・205
4　同　P-195
5　資料②P―22所収
6　資料⑦P―206・207
7（資料②P―24所収）
8　資料㉓『小諸郷友会報』参照
9　資料⑦P―209・210・217・220
10.　資料⑨P―69・81
11.　資料②P―39

12. 資料⑦P―223・224・227
13. 同　P―17
14. 蔵原惟郭（くらはらこれひろ）文久元年～昭和二四年　教育家　熊本県出身
熊本洋学校と同志社英学校を卒業後、明治十七年米国留学、次いで二三年に渡英
明治二四年帰国、熊本英学　校熊本女学校の校長を歴任、ＹＭＣＡ活動の協力者であった
15. 資料⑦P―199・203・204
16. 同　P―211・219
17. 資料⑤P―312・313・321
18. 資料⑦P―235・236・239・241・245
19. 同　P―252・253
20. 同　P―245・246
21 山路愛山（やまじあいざん）元治元年～大正六年　旧幕臣　新聞記者、評論家
静岡藩でカナダメソジスト平岩宜保により　入信、東洋英和学校神学で学び、徳富蘇峰の国民新聞記者、明治三一年から信濃毎日新聞主筆を務めている。内村鑑三との論争は生涯続けられた
22 資料⑦P―246
＊東儀隆子とうぎたかこ　明治七年～昭和二四年　雅楽家東儀彭質（たけかた）の次女　フェリス女学校卒、宣教師テヨーの助手として上田教会（車坂教会）を往来し熊二と知り合う、結婚後、三男四女を授かる。兄哲三郎は早大の「都の西北」作曲者
23 資料㉒　P―74
24 資料⑦P―246―258
＊大谷虞（おおたにやすし）明治二年～大正八年　高知県安芸郡生れ　基督教牧師
明治二三年明治学院神学部卒植村正久、井深梶之介から学ぶ。明治二九年から上田教会牧師。大正二年陸軍児玉源太郎の招聘に応じ、台北基督教会の牧師に就任している。

《熊二と関係のあった日本を訪れていた外国人基督関係者》

＊G・H・Fフルベッキ（ギド・ーヘルマン・フリドリン・フルベッキ）　1830～1898　オランダ出身
1852年二二歳で米国に移民、米国オランダ改革派教会の宣教師として安政五年長崎から入国、佐賀藩校、開成学校、明治女学校で教鞭を執る、日本各地を伝導、小諸義塾でも講演をしている
＊ダビット・モーレイ1830～1905　アメリカ出身教育者、
ラトガース大カレッジ教授　明治六年から同十一年まで文部省顧問として東大、東京女子師範の設立に関与、学制改正を手掛ける　帰国後は夫人と共にニューブラウンズウイック居住。
＊ヘボン（ジェームス・カーティス・ヘボン）1815～1911　米国生まれのスコットランド系移民。
プリンストン大、ペンシルバニア大で医学習得、安政六年米国長老派宣教医師として来日、成仏寺でブラウンと共に和英語林集成の編纂ヘボン式ローマ字を普及させる。
文久三年横浜にヘボン塾を開き、女子部はフェリス女学校。男子は明治学院となる
＊S・Rブラウン（サミュエル・ロビンス・ブラウン）1810～1880、米国生まれ、
安政六年オランダ改革派宣教師として神奈川に上陸、成仏寺でヘボンと共に日本語を学び聖書を翻訳、慶応三年に一時帰国、明治二年女性宣教師メアリー・ギダーを伴い来日、新潟英学校就任、次いで横浜にブラウン塾を開き明治二十年明治学院に発展、日本基督公会の横浜バンドを形成
＊M・ギダー（メアリー・エディー・ギダー）1834～1910（米国生まれ、
明治二年オランダ改革派宣教師のブラウン夫妻と共に新潟に入国、翌年横浜ブラウン塾に移る、明治六年E・Rミラーと結婚、明治七年フェリス女学院創立、東京一致神学校教授を兼任。全国各地で伝導活動。
＊E・Rミラー（エドワード・ローゼイ・ミロル）1843～1915　米国スコットランド系移民
長老派宣教師として明治 5 年来日ヘボン塾で英語を指導、M・ギダーと結婚後、所属問題から自給宣教師となり、東京一致神学校教授のメアリーと共に全国各地で伝導活動を行う
＊Dタムソン（デビッド・タムソン）
1835～1915　米国生れ　文久三年米国長老派宣教師として横浜に上陸、成仏寺でヘボン等と日本語を学ぶ、元治元年横浜英学校で算術、地理学を講義、明治四年欧米視察団の通訳として同行、明治六年東京基督公会新栄教会設立、明治十年、東京一致神学校講師となる。

＊J・Hバラ（ジェームス・ハミルトン・バラ）1832～1920米国生まれ、
文久元年オランダ改革派宣教師として妻マーガレットと共に神奈川に到着横浜居留地の
〈ボン〉塾で講師、 慶応二年横浜英学塾、明治四年バラ塾を開きで伝導活動、
横浜バンドを形成、明治十一年以降日本各地を伝度活動で訪れる。
明治十三創立のバラ学校（塾）は築地大学校〈その後明治学院となっている
＊M・ワイコフ（マーティン・ワイコフ）1850～1911　米国生まれ、
オランダ移民、明治五年オランダ改革派宣教師として横浜〈来日、福井県の中学で英語教師
（グリフィスの後任）明治七年新潟英学校、開成学校で英語・物理を教授明治十九年明治学
院で教鞭を執る
＊R・ピアソン（ルイーズ・ヘンリエッタ・ピアソン）1833～1899）フランス系米国人、
明治四年米国一致教会宣教師として来日、明治八年横浜に共立女学校創立。明治十四年
に共立神学校を併設、その後横浜共立学園となる。 生涯独身として女子教育に従事する。